

聖徒の道

1980年10月20日発行（毎月1回20日発行）第24巻第10号  
昭和42年12月18日第3種郵便物認可

# 聖徒の道

東京神殿特集号

10 1980





ふり注ぐ  
やわらかな光の中に見つけた  
確かな喜び  
それは——  
尽きることのない幸せへの  
旅立ち







長い間あたためてきたものが現実となって目の前に姿を見せる時、人はたとえようもない喜びに包まれる。そして、過ぎし日の苦勞の数々が、なつかしい思い出として一つ一つ胸の中によみがえってくる。

ここに東京神殿特集号を、喜びを一杯につめ込んでお届けしたい。日本の聖徒に対する主の期待と測り知れない愛を一つ一つの記事から感じ取っていただければ幸いである。

この小さな試みが、皆様の永遠の歩みの中で新たな一歩とならんことを。



コ楽もりのりる静楽

最智大

七二一七





# 末日聖徒イエス・キリスト教会

## 大管長会

スペンサー・W・キンボール  
N・エルドン・タナー  
マリオン・G・ロムニー

## 十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン  
マーク・E・ピーターセン  
リグランド・リチャーズ  
ハワード・W・ハンター  
ゴードン・B・ヒンクレー  
トーマス・S・モンソン  
ボイド・K・パッカー  
マービン・J・アシュトン  
ブルース・R・マッコンキー  
L・トム・ペリー  
デビッド・B・ヘイト  
ジェームズ・E・ファウスト

## 顧問

M・ラッセル・バラード・ジュニア  
レックス・D・ピネガー  
チャールズ・A・ディディエ  
ジョージ・P・リー  
F・エンツィオ・ブッシェ

## 国際機関誌

### 編集主幹:

ラリー・A・ヒラー

### 編集副主幹:

キャロル・モーゼス

### 子供の頁編集:

ハイディ・ホルフェルツ

### デザイナー:

ロジャー・ギリング

# もくじ

素晴らしいみ業に……………	スペンサー・W・キンボール……………	4
この輝しい喜びの時に……………	菊地良彦……………	6
神殿長ごあいさつ……………	ドウェイン・N・アンダーセン……………	8
『主の宮居』建設に携わって……………	サダオ・長田……………	11
東京神殿の完成に寄せて……………		13
なぜ、神殿を……………	ゴードン・B・ヒンクレー……………	19
神殿と永遠の結婚……………	スペンサー・W・キンボール……………	24
神殿建設の意義……………	マーク・E・ピーターセン……………	31
神殿を仰ぎみて……………	ジョン・A・ウイツツオー……………	45
死者の贖いに関する示現……………	ジョセフ・スミス……………	49
座談会『東京神殿のもたらす 意味を考える』……………		52
韓国の聖徒たちの喜びの声……………		59
神殿の完成に寄せる 聖徒たちの喜びの声……………		60
日本の聖徒の証(1)……………	奈良富士哉……………	62
日本の聖徒の証(2)……………	吉沢みどり……………	64
日本の聖徒の証(3)……………	和田健一……………	66
日本における教会80年の歩み……………		68
感謝のインタビュー……………		70
東京神殿、一般公開される……………		72

## 表紙の説明

東京神殿の正面ステンドグラス

## 聖徒の道 10月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会  
東京都港区南麻布5-10-30

印刷所 株式会社 精興社

配 送 東京ディストリビューション・センター  
東京都世田谷区上用賀4-9-19

定 価 年間予約1,700円 1部150円  
海外予約1,700円

INTERNATIONAL MAGAZINE PBMA 0733 JA Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0-41512

口座名 <sup>まつじつ</sup>末日聖徒イエス・キリスト教会  
東京ディストリビューション・センター





## 素晴らしいみ業に

大管長

スペンサー・W・キンボール

私たちはかつて経験したことのない大きな一歩を踏み出しました。教会は初期の時には、オハイオ州カートランドにその中心を置き、次いでイリノイ州ノーブー、そしてユタ州ソルトレーク・シティに移りました。また教会には、合衆国西部に隣接する諸州で急速に発展した後、ロッキー山間地方、次いで太平洋沿岸地方、さらには北アメリカ全域に及び、現在では全世界の主要な地域で発展しています。

「われ創世の前より隠されたること、すなわち時満ちたる神権の時代に関することをわが教会に示さんと図ればなり。」(教義と聖約124:41)

主はその目的のために主のみ名によって建てられた宮居で民にこの真理を明らかにすると仰せられました。灌油の儀式、死者のためのバプテスマ、聖会、記念と神託、これらはすべて聖なる場所である神殿において行なわれるものであり、またシオンの基に関する啓示も神殿で与えられるのです。このようにすべての神聖な事柄は、主が建てよと命じられた建物の中でのみ扱われるのです。

主はミズーリ州インデペンデンスやその他の地を神殿用地としてお選びになりました。

主は、主の長老たちがエンダウメントと祝福を受けることができるように、オハイオ州カートランドに神殿を建てるよう命じられました。

そして民が定着し、教会の組織がさらに充実すると、主は時を移さず予言者たちに啓示を与えて、神殿を建てるように命じてこられました。

「而してわが名により、最と高き者の住むべき一つの宮居を建てよと。

そは彼来りたもうて、汝らのすでに失いたるもの、すなわち彼の取り去りたまひしもの、すなわち完全なる神権を再び回復したもう土地はこのほか世に一つもあらざればなり。

そは彼ら、すなわちわが聖徒らが死者に代りてバプテスマを受くるための浸礼盤世になければなり。」(教義と聖約124:27 - 29)

皆様は、主イエス・キリストがニコデモに語られた言葉を覚えておられると思います。主は次のように仰せられました。

「よくよくあなたに言うておく。だれでも、水と霊とから生まれなければ、神の国にはいることはできない。」(ヨハネ3:5)

ペテロは、死者のための業が大切なことを次のように宣べています。

「死人にさえ福音が宣べ伝えられたのは、彼らは肉においては人間としてさばきを受けるが、霊においては神に従って生きようになるためである。」(1ペテロ4:6)

この理由から、私たちは歩みを早めて、この世の大勢の人々に福音を宣べ伝え、また系図探求を行ない、主の神殿において死者のための業を行なっているのです。

主はまた、獄中の捕われ人のために門戸が開かれる必要のあることを述べたイザヤの言葉を引用なさいました。

私たち、主の教会の会員が十分に信頼されるに足る者となって、福音を宣べ伝え、神権<sup>1</sup>を受け、霊界にいる人々のために門戸を開かなければならない理由はここにあるのです。

今私たちは皆様と共に喜んでいます。そして、皆様がこの素晴らしいみ業の中であって皆様の心の望みがか



なえられますよう、主の祝福と、主が下さる繁栄を祈っています。すべての幼な子、すべての若人、すべての成人が、この偉大なみ業に貢献していただければと願っています。また、すべての教会員は清く徳高く生活し、東京神殿に参入していただきたいと思います。

イザヤは次のように記しています。

「主の器をになう者よ、おのれを清く保て。」(イザヤ52:11)さて私たちは、皆さんが住んでおられる地域に神殿を建てるよう靈感を与えて下さったことに対し、心からの感謝を主に示して下さればと思います。皆様の家庭に、家族に、また個人の生活において主が皆様方すべてを祝福され、シオンがこの地に確立されるよう、私たちは祈ってやみません。



# この輝しい喜びの時に

日本・韓国地域代表役員

菊地 良彦

東京神殿完成、この歴史的な時を迎えるにあたり私の胸の中には、これまでの日本の教会における数々の思い出深い出来事が去来します。この輝かしい喜びの時をどれほどの人々が、どんなに長く待ち望んできたことでしょうか。日本の教会発展の基を据えられたヒーバー・J・グラント長老も私たちとそう遠くない場所で、この時を喜んで下さっていると思います。また、彼のなした貴重な働きに対して言い知れぬ感謝の思いがこみあげてきます。

1901年2月14日、ヒーバー・J・グラント長老は日本の人々に伝道する召しを受けました。グラント長老は、長老たちを伴い、1901年7月24日、ソルトレーク・シティを築きました。彼らが日本に到着したのは、1901年8月13日のことです。ヒーバー・J・グラント長老は日本の人々にこう述べました。

「こうして皆様方を前に、私はいと高き神の使徒とし、使いとして、皆様方に私たちが携えている重要なメッセージについてお考えいただくよう心からお勧めしたいと思います。

人々はより大きな光明、より高い真理が明らかにされる時代を待ち望むようになりました。そして今私は、皆様方にその真理が明らかになったことを宣言します。私たちはそのことを皆様方にお伝えるために、いと高き所におられる御方から権能を受けています。……

この神の権能によって、私たちは神聖な鍵を使い、日本の住民の前に天の王国の扉を開きます。そして、全国の民に申し上げます。義の御方から注がれる光のもとにきなさいと。私たちは値を付けることのできない祝福を皆様方に与えましょう。

その祝福は人間のものでなければ、人間の能力によってもたらされるものでもありません。それらは真実の生ける神が住み、権威と栄光をもって統治しておられる天からもたらされるものなのです。

神聖な永遠の御方に通じる道を歩んでいただけますように。そうすれば、皆様方の身と霊は平安と愛と喜びで満たされ、……皆様の栄えと支配は日の光栄の如く永遠に続くものとなることでしょう。」

兄弟姉妹の皆さん、私たちは今、「値の知れない祝福」を手に入れようとしています。それは、「神聖な永遠の御方のみもとに通じる唯一の道」です。私たちは主の宮居における完全な祝福と儀式を受けることによって、平安と愛と喜びに満たされることでしょう。そして私たちはさらに豊かな光と真理にあずかることでしょう。これは、福音のパノラマ（大観）の中で想像を絶する麗しさを放つことでしょう。時の絶頂以来、神殿に伴う完全な祝福がアジアにもたらされるのは、これが初めてのことです。

グラント大管長とその同僚たちが日本に到着してから、すでに79年の歳月が流れました。全能なる神はこれまで私たち日本人に多くの祝福を与えて下さり、今また東京神殿を与えて下さったのです。

そして、そこでは聖なる神権の鍵が授けられ、皆さんは誉れと栄光を受けることができます。

これまで代々にわたってアジアに住んでいたすべての民が、今まさにこの聖なる宮居、東京神殿で確かな知識と光を受ける時がやってきたのです。

今こそ私たちは互いに一致して、この日本の地にシオンのステーキ部を打ち建て、地の隅々にまでシオンを広げるようにしようではありませんか。そして日の光栄の王国の律法の要求する和合一致に従ってみ業を推し進めていきたいと思ひます。

「兄弟よ、われらまことに偉なる大義に向って進まざらんや。進み行きて退くことなかれ。奮い起てよ、兄弟たち。進み進みて勝利に至れ。汝ら喜べ大いに喜べよ。世の人、歌声を張り裂けしめよ。死者よ、王インマニユニフルに永遠讃美の歌を語り出だせ。インマニユエルこそ創世の前より、われらをして死者をその囚屋より贖うを得しむることを定めたまへり。そは囚人は釈さるべければなり。

山々は喜びの声を挙げよ。汝ら谷よ、皆声高く叫べ。すべて諸々の海と乾ける地とは、汝らの永遠なる王の為したもう驚嘆すべき御業を語れ。河よ、小川よ、谷の流れよ、喜びの声を挙げて流れ下れ。森よ、野の樹よ、みな主を讃えいわおうたよ。堅き巖よ、喜びに泣け。日よ、月よ、暁の星よ、共に唱え。神の子らよみな喜びの声を挙げて叫べ。永遠の創造物よ、御名をとこしえに宣べよ。われまた汝らに告ぐ、われら天より聞く声は如何ばかり榮あるや。その声はわれらの耳に、栄と救いと誉と不死不滅と永遠の生命と、また王国と公国と権能とを告ぐるなり。」(教義と聖約 128:22-23) 私の思いも正にこのジョセフ・スミスと同じです。主イエス・キリストのみ名によって申し上げます。



## この召しに全身全霊を

東京神殿長

ドウエイン・N・アンダーセン

1980年2月15日のことでした。私はブリガム・ヤング大学の私の部屋で、学業上の問題を抱えている学生たちのカウンセリングを行っていました。すると、ソルトレーク・シティーからの電話で、キンボール大管長がその日の午後4時たに、大管長の自宅で私に会いたいとのことでした。私は昼食のために家に帰った時、キンボール大管長が私に会いたいと言ってきたと妻に話しました。しかし妻は笑うだけでした。私が冗談を言っていると思っていたようでした。

私は予言者の前に座り、「あなたはアジアにおける初めての神殿の神殿長に選ばれました」と言う言葉を聞いた時、胸の高鳴りを抑えることができませんでした。このような神聖な責任に召されたことは、何という名誉であり、特権でしょうか。と同時に、自分には数々の弱点があり、能力も十分ではないことが思い起こされました。日本語に対する理解力の不足やその他の弱点は、とても克服し難いもののように思われました。その時、私の心に、1ニーファイ3:7の聖句が浮かんできました。「私は主が命じたもうたことを行って行なう。私は、主が命じたもうことには、人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり、それでなくては、主は何の命令も人に下したまわれないことを承知しているからである。」この聖句によって、私は召しを引き受ける勇気が出てきました。

それからの毎日は、驚くようなことの連続でした。第一副神殿長にユークス・井上兄弟、第二副神殿長兼神殿事務局長に松下泰洋兄弟を選び、神殿長会の力を増し、均衡を図ることができました。キンボール大管長がタナー副管長とロムニー副管長の助けを得て、私を神殿長に任命し、結び固めの権能を授けて下さった時のことを、私は忘れることができません。早速、私は自分の家庭と個人的な事柄の整理にとりかかりました。続いて、ソルトレークプロボ、ハワイの各神殿で、信仰が篤く献身的な神殿職員から訓練を受けました。こうして日本に再び、帰ってくる日を待ち受けていたのです。1980年7月8日、私たちは成田空港に到着しました。多くの友人たちが私たちを歓迎してくれました。また、「WEL-COME HOME (ようこそ、故郷へ)」という文字を見た時、私たちは胸が熱くなるのを覚えました。私たちは、その時自分の故郷へ帰ってきたと本当にそう感じたからです。そして再びこの日本に戻ってこ



左よりユークス・井上、ドウエイン・N・アンダーセン、松下泰洋の各兄弟

られたことに深い感動を覚えたのです。神殿は私たちが想像していたよりも大きく、美しい建物でした。私たちは、教会員、非教会員を問わず、この壮大な建物を建てるために長い間一生懸命に働いて下さった献身的な方々に心から感謝しています。主に捧げるこの壮大な記念物を建てるに当たって、彼らは主のみたまに導かれ、励まされてきたことでしょうか。主は必ずや彼らの働きを喜んでおられることと思います。

こうして日本の地を訪れて以来、私の心に幾つか過去の出来事がよみがえってきます。私は、グラント大管長が日本の地でイエス・キリストの真の福音を宣べ伝える門戸を開くために熱心に働いた時の苦難について考えました。当時ほとんどの日本人は、まだ霊的に準備ができていませんでした。伝道部が一時閉鎖されることになった1924年までに福音を受け入れたのは、ほんの一握りの人々に過ぎませ



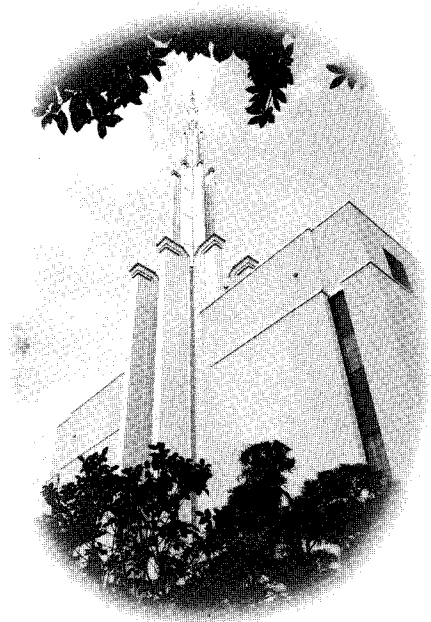
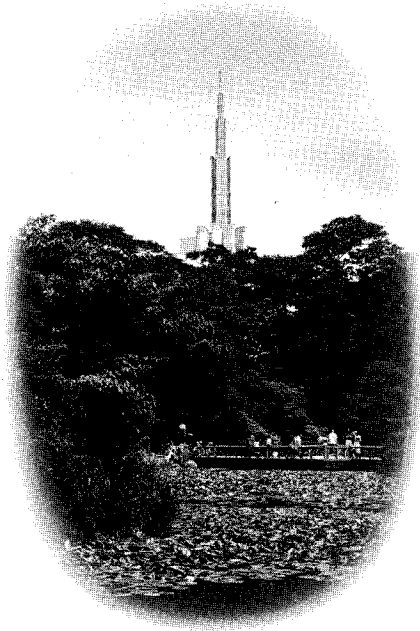
んでした。また私は、1951年に初めて日本を訪れた時のことを思い出しました。その時、人々は衣食をまかなうためにお金を得るのがやっとという状態でした。私は、日本では教会の完全なプログラムを実施するのは不可能だと考えたほどでした。しかし、1962年に再び日本を訪れた時はもう様子が一変していました。教会の発展は著しく、近い将来ワード部やステーキ部を設立することも可能だと思われたのです。しかし、まず初めに神権者を増やし、強め、教会の完全な福音のプログラムを見通す力を与える必要があります。そこで1965年、神権指導者夫妻のために飛行機をチャーターしてハワイ神殿を訪問する計画を立てました。それはまさに奇跡でした。神殿でメッセージを聞き、みたまを感じた時の日本人の聖徒たちの顔は喜びの涙で濡れていました。その光景は、教会の初期の時代、カートランド神殿の献堂に際して起こった出来事をしのぐほどのものでした。このハワイでの歴史的な出来事に続いて、大勢の信仰篤い日本人の会員たちがハワイやソルトレーク・シティを訪問し、自分と先祖のために神聖な儀式を受けるようになりました。その結果、ステーキ部やワード部が設立されるに至ったのです。こうした日本人の聖徒たちの献身は主を喜ばせ、主の予言者の心を動かしたのです。1975年、キンボール大管長は日本に神殿を建てることを発表しました。これは、非キリスト教国における最初の神殿です。

今日、この栄えある神殿は完成しました。この神殿はアジアにおける新しい霊性の時代を開くことでしょう。教会員が主の宮居で奉仕し、神聖な儀式に参加する時、さらに大きな犠牲と献身が求められるかもしれません。しかし、それに対して、どのような犠牲にも勝る永遠の報いが与えられるに違いないのです。家族は強められ、個人の生活は高められることでしょう。人生の目的はさらに明確になり、結び固めの絆は永遠に続くのです。

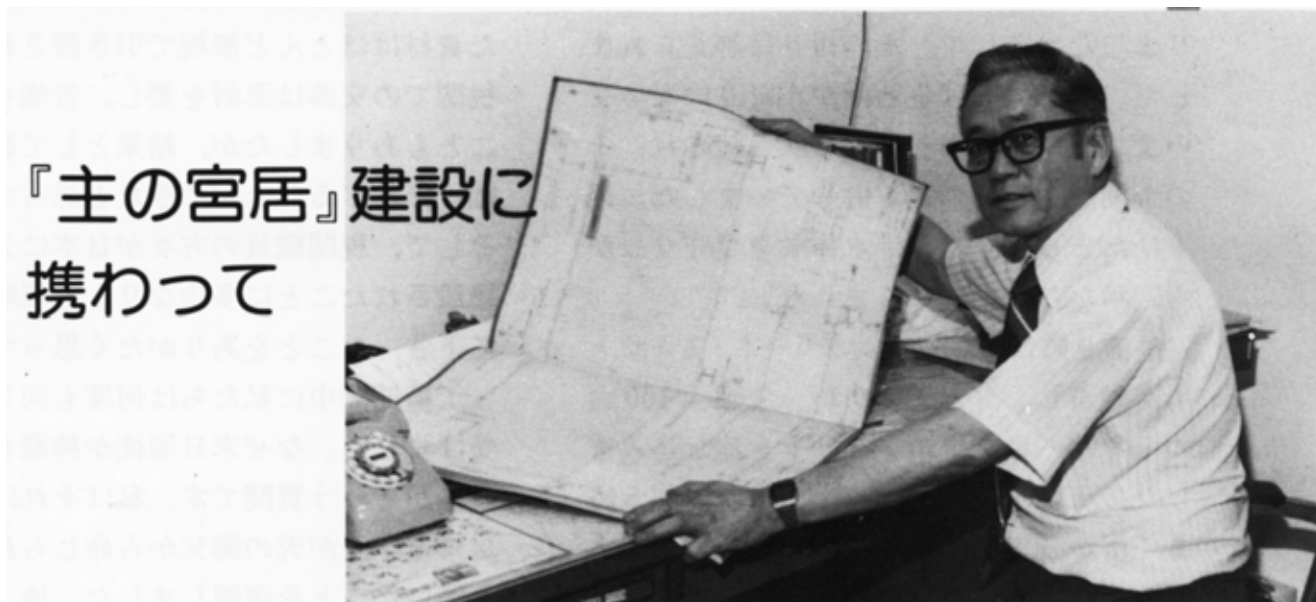
神殿で行なわれるのは、生者と死者のための儀式です。しかし、そこで与えられる知識と指示は、生者がこの地上での試みやチャレンジに応えられるように助けてくれるものです。私たち神殿長会は、神殿活動に全身全霊を傾けることを約束し、日本やアジアの聖徒たちを心から歓迎したいと思います。そして、すべての教会員が主の宮居に参入する備えをして、主の聖なる儀式とそれに伴う豊かな祝福を受けられるように心から願っています。



東京神殿スナップ



ここに東京神殿の建設に持てる力を捧げたひとりの信仰篤い末日聖徒がいる。その人は神殿の建築担当部長を務めたサダオ・長田兄弟。今、その尊い責任を果たし終えた彼に喜びの気持ちをつづっていただいた。



東京神殿建築担当部長サダオ・長田

有栖川宮記念公園の西側に、堂々としたたたずまいを見せる東京神殿。東京神殿は今、公園の深い緑やスイレンの花咲く池と調和して、道行く人々の目を一身に集めています。

私は、東京神殿の建設に携わる機会が与えられたことを心から感謝しています。工事中は訪問者の見学をお断わりして、皆様に御迷惑をおかけしましたが、おかげさまで事故による遅れや負傷者も出さずに無事工事を完了することができました。その上、工事現場の安全対策が非常に優れていたということで監督者が名誉ある表彰を受けました。これはすべて主から与えられた恵みによるものだと思います。

工事に際して数多くの問題が発生し、私たちは変わらぬ祝福と導きを求めて毎日天父に祈りました。特に困難をきわめたのは、神殿のシンボルタワーの設計でした。日本は地震や台風の多い国です。そのため設計もたいへん手間が掛りました。約1年間にわたって図面を検討し、さらにコンピューターを導入し、力学的な分析も行ないました。その結果、設計の段階ですでに建築関係者や技師たちを満足させ、東京にあるどのビルよりも耐震性のある建物になることが証明されたのです。

建築が始まってしばらくした頃、地下に500立方メートルのコンクリートを流し込む作業がありました。ところが、前日の夜から雨が降り始め、翌朝7時に私が現場に行った時には激しい雨になっていました。すでにコンクリートを流し込むポンプが2箇所には据えられていましたが、この大雨では作業を中止するしかありません。もしそうになったら、前もって注文しておいた大量の生コンをどしたらよいでしょうか。また、もう一度注文することになれば、一週間は工事が遅れてしまいます。私たちは祈りました。そして、その祈りは答えられました。空を見上げると雨が小降りになっていました。厚い雨雲は風に吹き流され、その合間から太陽の光が射していました。地下にたまった雨水の排水作業を見守りながら、私たちは大喜びしました。

午前9時に最初のコンクリート・ミキサー車が到着し、夕方までかかって延べ100台のミキサー車がコンクリートを流し込みました。それが終わると、作業員が翌朝5時までかかってコンクリートの仕上げをしました。皆、一生懸命に働き、思いもかけず丸一日で作業が終わったことに深い満足を覚えました。主の助けがなければとても一日ではできない仕事でした。

もうひとつの大きな問題は、外国から資材を輸入することでした。これには非常に多くの時間を費やしました。



私たちは、材質と価格とを考慮して、できる限り国産の資材を使って神殿を建設しましたが、中には、南北アメリカやヨーロッパ、アジア諸国からの輸入に頼らなければならないものもありました。クリスタルのシャンデリア、正面のスタンドグラス、じゅうたん、防音効果のあるフォールディングドア、音響装置などがそれです。輸入は船便で行なわれるため、注文から配達までかなりの日数を要しました。さらに、日本の税関で綿密な検査が行なわれ、その説明に多くの時間が費やされました。私たちは税関に行く前に心から祈り、平安な気持ちで「主の宮居」について適切な説明ができるように願い求めました。こうして建築工事の最後の6カ月間というもの、毎日毎日福音を教え、日本に神殿を建築する理由を説明する日が続きました。そのかいあって、私たちの話はすべて好意をもって受け入れられ、輸入した資材はほとんど無税で引き渡されました。税関での交渉は忍耐を要し、苦痛を感じることもありましたが、結果として経費を大幅に節約することができたと思っています。そして、税関職員の方々が日本にシオンが建設されたことに多少なりとも理解を示して下さったことをありがたく思っています。

工事期間中に私たちは何度も同じ質問を受けました。なぜ末日聖徒が神殿を建設するのかという質問です。私はそれに対してソロモン王が天の御父から命じられて神殿を築いたことを説明しました。地上における家族関係が霊界でも引き続き存在するということが聖典にはっきりと記されています。そのために必要な儀式はすべて、その目的のために建てられた神殿で行なわれて初めて、受け入れられるのです。神殿の重要な使命は、この世で福音を聞くことのなかった死者のために、代理の儀式を執行することです。

日本という主の葡萄園で王国建設のために働くよう召されたことは、素晴らしい特権でした。神殿の工事は、どの点をとってみても満足のゆく最高のものです。日々私たちの上に注がれた主のあつい恵みに感謝します。いと高き者に捧げるこの神殿の建設は、確かに主から命じられたものであり、生ける予言者スペンサー・W・キンボール大管長を通して私たちに啓示されたものであることを証します。すべてイエス・キリストのみ名を通して申し上げます。アーメン。

# 東京神殿の完成に寄せて

「日本に神殿の建つ日が来るであろう」

このマシュー・カウリー長老の予言はまさに成就した。

今や新たな希望と決意に燃える日本の聖徒たち。

東京神殿の完成を共に喜びながら、この神殿のもたら

す意味をよく考えてみたい。

## 予言の成就

1975年8月8-10日の3日間・東京の日本武道館において催された末日聖徒イエス・キリスト教会日本地域大会。あの時の情景が日本の末日聖徒の心の中に強烈な印象となって刻み込まれているのは、あまりにも大きな祝福によるためであろうか。特に大会2日目の冒頭に、スペンサー・W・キンボール大管長によって行なわれた東京神殿建設の発表は、この上ない祝福であった。会場を埋めた一万数千の聴衆からは、期



せずして感動の拍手が起こったほどである。うれしさのあまり、抱き合ったり、感涙にむせんだりする人々の姿もあった。それはみたまに満たされた実にうるわしい光景である。

十二使徒のマシュー・カウリー長老はかつて日本に神殿が建つ日の来ることを予言した。しかし、これほど早く日本の地に神殿が建とう・とはだれが予測し得たであろうか。率直なところ、驚きであった。

東京神殿の建設、それは日本の教会史における画期的な出来事と言わなければならない。

## 多くの人々の犠牲の上に

20年ほど前までは、日本の聖徒たちにとって神殿は文字通り、「遠い存在」であった。待ち望んではいたが、神殿への参入は夢でしかなかった。ところが1965年の夏、ハワイ神殿への訪問というかたちでそれは実現した。

160余名の参入者の喜びはたとえようもなく深いものであった。その感動の数々はかつて本誌にも紹介されたが、そこには人人の心を打つものがある。その一部を取り上げてみよう。

「……その後、永遠の結婚の儀式をおごそかに受けました。この日は感激の連続で妻と共に目を赤くはらしてしまいました。思えば長い婚約期間でした。……」





「ハワイ在住の多くの方々の真心あふれる歓待に対してただ感謝と感激あるのみでした。」

こうした日本の聖徒たちによるハワイ神殿への訪問は、その後も数回行なわれ、その都度参加者の数は増えていった。

また、1970年10月には、ソルトレーク神殿へのグループによる神殿訪問も許可された。この時の参加者は300余

名で、ソルトレーク神殿で儀式を受けるだけでなく、タバナクルにおいて催された教会の半期総大会にも出席することができた。ある兄弟は、「ソルトレーク・シティーでの経験は、私の生涯で最も霊的な素晴らしいものだった」と述懐するが、この言葉には参加者すべての一致した思いが込められている。

しかしながら、こうした陰に当時の聖徒たちの並々ならぬ犠牲があったことは言うまでもない。初めてのハワイ神殿訪問の際には、訪問の費用を捻出するために、本人はもちろんのこと、他の聖徒たちも一致協力し、力の限りを尽くして働いた。真珠のネクタイピンの販売や「日本の聖徒は歌う」のレコードあ吹き込みなど、数多くの支援活動が繰り広げられたのである。また物質面だけでなく、霊的、精神的な面においても、聖徒たちの準備が整えられた。

この東京神殿の建設にあたって、聖徒たちは、かつて受けたことのないような試練に遭いながら、多大の犠牲を払ってきた。しかし、これらの犠牲は神殿に参入して得られる祝福に比べれば、はるかに小さいものである。神殿のもたらす祝福がいかに大きなものであるかは、参加者一人一人の証がそれを物語っている。

東京神殿は日本の聖徒たちのひたむきな信仰と切なる願いにより主から賜ったものである。だが、この祝福は日本の聖徒たちの力だけで得られたものではない。いつも勧告や励ましを与えてくれる大管長会をはじめとする教会幹部や指導者、愛と奉仕をはらから惜しまない世界中の同胞、この地において今まで主



の福音を伝えるために尽くした数知れない宣教師たち、さらには血のにじむような苦勞を重ねた先人たち。こうした多くの人々の目に見えない献身的な働きによって東京神殿が築かれたことを私たちは忘れてはならないのである。

## アジアにおける初めての神殿

東京神殿は、アジアで最初、世界で18番目の神殿である。この神殿は、日本のほかに、韓国、台湾、フィリピン、香港などアジアに住む約8万の聖徒たちのために建てられたものである。

神殿は東京都のほぼ中央に位置する港区南麻布にある。この一帯は、都内でも有数の高級住宅地、文教地区として知られるところである。神殿の前方には由緒ある有栖川宮記念公園の緑が広がり、後方には高級住宅にまじって、ブルヴリア、スイス、ノルウェーなど、近代的な大使館の建物が見られる閑静なただずまいである。

環境としてこれほど恵まれたところも少ない。威容を誇る東京神殿は、このような環境にふさわしい建物である。神殿の敷地約1000坪には、以前伝道本部の建物が建っていた。かつてアジアの極東における伝道の拠点であったこの建物が、今や神殿にとって変わったのである。この地はアジアでの伝道の発展の歴史が刻まれているきわめて意義深い地と言えよう。また交通の便も至ってよく、最寄りの地下鉄広尾駅からは徒歩わずか5分。これは、ここに神殿の敷地が選ばれた要因のひとつであった。

神殿は地下1階、地上4階で、1階の床面積は920平方メートル、2階以上はそれぞれ600平方メートルである。建物の主要部は地上約20メートル、ステンドグラスを配した塔を含めると55メートルの高さに及ぶ。建物は耐震構造の鉄筋コンクリート造りで、表面には灰色のみかげ石が使われている。建物の内部は次の通りである。

1階にはロビー、神殿長会とメイトロン（花嫁介添役）の事務室、子供控室、神殿衣貸出しカウンター、食堂、台所、洗濯室が設けられている。

また他に、ガーメント販売所が設けられているが、ここへは専用の入口からしか入ることができない。

2階には、男女の更衣室、花嫁の控室、花嫁、花婿の指導室が設けられている。また、神殿長夫妻の住居も2階に設けられているが、これには外部専用出入口が利用される。

3階には、120名収容できる神殿参入者用の礼拝堂と、永遠の結婚式を執り行なう結び固めの部屋5室が設けられている。また、この階には神殿職員用の更衣室と控室がある。

4階には各100名収容できる儀式的な部屋がふたつと、日の光栄の部屋が設けられている。

地下には、12頭の牛の像の上にのせられたバプテスマフォント（浸礼盤）があり、他に機械室、倉庫などが備えられている。

一方、建物の敷地には、日本の伝統を生かした庭園が作られている。そして周囲には鉄製のフェンスがめぐらされ、外側から庭園が眺められるようになっている。



## 『聖なる宮居』に

一昨年の4月着工以来、完成までに2年2カ月を要した。この間、工事にまつわるエピソードも数知れ



ない。神殿の駐在技師を務めた教会員のサダオ・長田兄弟にその幾つかをお聞きしてみた。

長田兄弟は建築に携った人々のなかで唯一の教会員。建築を請け負ったのは鹿島建設(株)とその関連業者である。皆、教会員ではない。

長田兄弟は「伝道を考える場合、これほどふさわしい機会はなかった」と語る。

「聖なる宮居」を建築するために日曜日すなわち安息日の労働は当然避けられた。また、平日の労働時間も地域住民への工事騒音の配慮から午前8時一午後5時までとされた。これは教会としての標準によるものである。



教会としての標準と云えば、工事関係者には「知恵の言葉」の戒めが徹底していて、彼らは勤務時間中に敷地内でタバコを口にする事は決してなかった。神聖な建物を手がける人々の心配りが殊の外、よく感じられる。

また、長田兄弟は工事関係者に、折をみて教会のこと

をいろいろ話されると聞く。こうしてまかれた真理の種がいつか実を結ぶよう心から祈るものである。

東京神殿は、この地域ではひときわ目立つ建物であるため、近隣住民の関心も高い。神聖な影響力がこの一帯に広く及ぶことは間違いないであろう。

55メートルの高さのタワーは、かなり遠方からも眺められる。日射角度によって銀色やオレンジ色など様々な輝きを見せる。外壁は、茨城県産のみかげ石。灰色がかったその色調は重厚そのものである。人々の霊性を鼓舞する役割を担うこの建物に実にふさわしい外観と言えよう。

内部に目を転じてみると、そこには光に満ちた空間が広がる。各部屋や廊下に敷きつめられたじゅうたんは、それぞれの壁の色に調和しており、その暖かくソフトな感触には深い安らぎを覚える。これらのじゅうたんはほとんどアメリカからの輸入品。他にアメリカからのものとしてはスタンドグラス、スクリーン、オーディオ機器などがある。豪華なシャンデリアは西ドイツ製。これらはいずれも品質、価格などの面から厳選された。

その他、家具等はすべて日本製の特別注文。その一つ一つに独特の技法がこらされており、まさに芸術品と言える。

東京神殿はいたるところに優れた材質が用いられ、管理システム、空調、自家発電などの機器にしても最新の技術と設備が施されている。

## 神殿 この大いなる祝福

1901年に日本で伝道が開始されてから、来年でちょうど80年になる。これまで教会の活動は、戦時中に伝道本部が一時、ハワイに移されるなどして、その歩みは決して順調とは言えなかった。日本でそれが着実に根をおろすようになったのはここ20数年のことである。そのため改宗者のほとんどは戦後にバプテ

スマを受けた人々である。伝道部がひとつしかなかった十数年前の状況を思うと、隔世の感がある。最近  
はまた、今までにも増して主のみ業がその歩みを速めている。

現在、20 万以上の人口を持つ都市にはワード部や支部、もしくは伝道所が置かれている。その数は 250  
カ所以上にのぼる。このことは教会の発展を物語る何よりの証拠であろう。伝道の業はこれからますます  
その歩みを速めていくことであろう。そして主の生ける福音が日本の津々浦々にまで雄々しく広がって  
いくに違いない。そういう期待をもって将来を眺める私たちにとって、東京神殿の完成は非常に大きな意  
味を持つ。なぜなら、神殿は主の教えを受け入れたすべての人をその永遠の行く末に向けて備えさせると  
ころだからである。

いよいよ、11 月から神殿の業務が開始される。これまでの経過を見てもわかるように、神のみたまは、  
あらゆる地に、あらゆる人々の心に働きかけてきた。天父がいかに日本およびアジアの聖徒たちに期待を  
寄せておられるかは容易に思いはかることができよう。

また不確実と混乱に満ちた現代社会において、神の聖なる宮居である神殿が世界最大の都市東京に建て  
られたことは意義のあることである。日本は言うに及ばずアジアの義の拠点として存在することの価値を、  
私たちは再認識する必要があるのではないだろうか。

東京神殿は、奇しくも教会設立 150 周年の年に完成を見た。まさに二重の祝福である。この大いなる機  
会に心から感謝すると共に、本年をアジアの同胞への伝道の第一歩としたいものである。



# なぜ、神殿を

十二使徒評議員会会員ゴードン・B・ヒンクレー

静かに自己を見つめる時・生命の繻な神秘に思いをはせない人が、はたしているだろうか。彼はこう問いはしないだろうか。「誕生前に私は一体どこにいたのか。どうして今この地上にいるのか。死んだらどうなるのか。創造者と私との関係は？ 死はまわりの人々との決別なのだろうか。妻や子供はどうなるのか。死後別の世界が存在するのだろうか。存在するとすれば、そこでは親しい人々に会えるのだろうか」と。

これらの疑問への解答は、人の知恵で見いだせるものではない。それは啓示された神のみ言葉の中にのみ見いだされるのである。末日聖徒イエス・キリスト教会の神殿は、そのような疑問に解答を与えてくれる神聖な建物である。神殿はすべて、世から隔離された神聖な平安の場、主の宮居として奉献され、そこでは真理が教えられ儀式が行なわれる。そして人々は、そこから永遠の事柄に関する知識を得、神の子供として自分に受け継がれている神聖なものを知り、永遠の存在である自分の可能性を念頭に置いて生活することを決意するのである。

一般の礼拝堂とは区別して、特定の建物を特定の儀式のために設けることは、何も目新しいことではない。それは古代イスラエルでも行なわれていた。イスラエルの民はいつもは会堂で礼拝したが、さらに神聖な場



所として、最初に荒野で至聖所を備えた幕屋を造った。こうして数々の神殿が建設され、その中で特別な儀式が行なわれた。そして、その儀式にあずかることができたのは資格を持った者だけであった。

それは現在も同じである。末日聖徒イエス・キリスト教会は、神殿を奉献する前に一般の人々に公開する。しかしいったん奉献されれば神殿は主の宮居となり、神聖なものとなるために、ふさわしい教会員しか入ることができない。それは、秘密とするためではなく、神聖だからである。

私たちは神殿の儀式を通じて、神の子供である私たち人間に関する神の永遠のみこころを知ることができる。その大半は、私たちの属する神の永遠の家族と地上の家族に関することである。また結婚誓約と家族関係の神聖さや永遠性をも教えてくれる。

地上に生を受けるあらゆる人が、神聖な何物かを付与された神の子供であることもはっきり教えられる。このような基本的、根本的な教えを繰り返し学ぶことは、それを受ける者を啓発する。参加者は、美しく印象的な言葉で語られた教えを耳にし、全人類が天父の家族に属する天父の子供であり、兄弟であることを理解するのである。

救い主は律法学者に「すべてのいましめの中で、どれが第一のものですか」と尋ねられた時にこう答えられた。「『.....心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。第二はこれである、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』」(マルコ 12 : 28, 30-31)

近代の神殿の中で示される教えは、この一番大切な人の義務、すなわち創造主と兄弟とに対する義務に重点を置いている。そして数々の神聖な儀式は神の家族に関する教えを説いている。また朽ちる体と対照的に、私たちの内なる霊が永遠であることも教えている。さらに、その儀式によって大いなる真理を理解できるだけでなく、神を愛し、天父の子供たちとなおいっそう睦み合おうという決意が生まれるのである。

人が神の子供であるという前提に立つと、人生に神聖な目的が生じる。主の宮居ではそのことに関しても明らかな真理が教えられる。この世での生活は、永遠の旅の一過程である。私たちは地上に来る前、霊の子供として生活していた。聖典にはそれを証するものとして、エレミヤに対する主のみ言葉が記されている。



「わたしはあなたをまだ母の胎につくらないさきに、あなたを知り、あなたがまだ生れないさきに、あなたを聖別し、あなたを立てて万国の予言者とした。」  
(エレミヤ 1:5)

私たちはこの世の両親の子供として、その家族に生を受ける。両親は、神の子供たちに関する永遠のみこころを成就するため、神の助けを得て働く。家族がこの世にあっても永遠にあっても最も重要かつ神聖な制度である理由はここにある。

神殿内で行なわれることの多くは、家族に関係している。私たちはこの世に生まれる以前に神の子供として存在していたが、死後もなおそのような状態が続くのである。この世における満ち足りた人間関係の中で最も深く美しいものは家族の中に存在し、それは次の世まで引き継ぐことができるのである。この考えが、神殿の目的を理解する根本である。

主の宮居に来て祝福にあずかる夫婦は、この世限りでなく永遠に結ばれる。国の法律では死がふたりを分かちつまで結ばれるが、神の永遠の神権によれば天においても地においてもふたりは永遠に結ばれるのである。こうして結婚した夫婦は、祝福にあずかるにふさわしい生活を送るならば、自分たちの関係や子供たちの関係が死によって終わらず永遠に続くという確信を神から与えられるのである。

女性を真心から愛した男性、男性を心から愛した女性で。ふたりの愛が死後も続くことを願わなかった



人はいるだろうか。子供を亡くした両親で、次の世で再び子供にまみえることを願わなかった人がいるだろうか。人生の最も貴重な属性は愛であり、それが最もよく表われているのが家族関係である。永遠の生命を信じる人の中で、天の神が息子、娘にこの愛を与えるのを拒まれると信じる人可以いるだろうか。いないはずである。理性は家族関係が死後も続くと言ひ、人の魂はそれを願ひ焦がれる。天の神はそれを實現する方法を啓示された。主の

宮居の神聖な儀式がそれである。

しかし、もしこれらの儀式の祝福が、現在末日聖徒イエス・キリスト教会の会員となっている人だけに限られるとしたら、利己的と思われるであろう。だが実際は、神殿に来て恵みにあずかる機会は、これから先福音を受け入れ、バプテスマを受けて教会に入るすべての人に開かれている。そのため、教会は世界各地で伝道計画を推進し、可能な限りこの計画を広げようと努めている。神が啓示されたように、「あらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国語の民およびあらゆる人々」に福音を教えることは、教会の責任だからである。

ところが、かつて地上に生を受けながら、福音を聞く機会のなかった人々が無数にいる。彼らは、教会の神殿で得られる祝福を受けられないのだろうか。

この世を去った人々は、生者がその代理となって、まったく同じ儀式を受けることができる。死者のために地上で行なわれるバプテスマ、結婚、家族の結び固めなどの儀式を、霊界にいる死者たちは受けるも拒むも自由である。主のみ業に強制はない。あるのは機会である。



この代理の儀式は、死者に対する生者のたぐいない愛の業である。そのためには、すでに世を去った人々の身元を確かめる大がかりな系図探求が必要である。その系図探求を援助するために、教会は系図計画を立て、世界に類を見ない探求のための設備を整えている。記録保管庫は一般公開され、教会員でない人の先祖探求にも役立ってきた。この計画は全世界の系図学者から賞賛を受け、歴史記録の保管庫として各国に利用されている。しかしその本来の目的は、自分たちが得ている祝福を死んだ先祖にも分かち与えるために、先祖の身元を明らかにする資料を教会員に提供することである。教会員はこのように考える。「自分が妻子を愛して永遠に一緒にいたいと思うなら、祖父や曾祖父や、そのまた先祖たちも、同じ永遠の祝福を受ける機会があってもよいのではないかと」。

このように、これらの神聖な建物は、静かに敬虔に推進される膨大な活動の場なのである。それは黙示者ヨハネの記録した質問と返答のあの示現を思い出させる。「『この白い衣を身にまとっている人々は、だれか。また、どこからきたのか』。……『彼らは大きな患難をとおってきた人たちであって、その衣を小羊の血で洗い、それを白くしたのである。それだから彼らは、神の御座におり、昼も夜もその聖所で神に仕えているのである。』」（黙示7：13-15）

この聖なる宮居に来る人々は、中に入ると白い衣を身にまとう。彼らは皆、地域の教会指導者から資格ありと認められ推薦を受けて来る。彼らは清い心と清い体と清い衣をつけて神の神殿に入るよう求められるのである。中に入る時は、世の物事をあとにして、神についての事柄に集中しなくてはならない。

この礼拝(もしもそのように呼べるとしたら)には報いが伴う。この緊張の時代に、時々世を離れて主の宮居に入り、そこで静かに神に関わる永遠の物事に思いをはせたいと思わない人がいるだろうか。この神聖な場所では、他のどこからも得られない機会が与えられる。そこでは、人生の本当に大切な物事を知って、思いをめぐらすことができる。神と私たちとの関係や、前世からこの世に続き、さらに再び人々とまみえることのできる将来へとつながる私たちの永遠の旅について。私たちは、愛する人々や、自分に体や精神や霊の遺産を伝えてくれた遠い先祖たちと再び会うことができるのである。

神殿はあらゆる建物の中にあって異彩を放っている。それは教えの家であり、誓約と約束の場である。私たちは聖壇で創造主なる神のみ前にひざまずき、永遠の祝福を約束される。その神聖な環境の中で、贈い主、救い主なる御子、主イエス・キリストを思い、主と交わるのである。主は私たち一人一人のために犠牲となって下さった。私たちは神殿で、私欲を捨て、自分では働くことのできない人々のために働くのである。こっして、私たちは最も神聖な関係に結ばれるのである。夫と妻、親と子、家族として、時も死も越えた絆に。

この神聖な建物は、末日聖徒が憩う暇なく迫害によって住み家を転々と変えたあの暗黒の時代にも、建設された。窮乏の時代にも繁栄の時代にも、建設され、守られてきた。確かに神殿は、生ける神と復活された主、そして予言者と神よりの啓示に対して証を持ち、主の宮居における以外に永遠の祝福の安らぎと確信は得られないとする大勢の人々の力強い信仰の所産なのである。



# 神殿と永遠の結婚

大管長 スペンサー・W・キンボール

生命は永遠であり死は存在の終着駅ではない。人はいつまでも生き長らえるからである。善人、悪人を問わず、人は必ず復活する。人の霊は体と再び相合して墓から出てくる。人が人生を全うし、神より与えられた機会を最大限に生かしてこの世の生活を過ごしたならば、その霊と体は相合して、いつまでも朽ちることのない新たな不死不滅の状態となるのである。

真の結婚生活に伴う最大の喜びは永続させることができる。この上なく美しい親子の関係も、永久のものとしてすることができる。夫と妻が永遠の結婚という聖なる絆で結び固められている限り、家族の至純な交わりは決して終わることがなく、また喜びと進歩は尽きることを知らない。しかし、これは決してひとりだけで起こるものではない。

その道は明らかにされている。永遠の結婚のことはアダムや他の予言者たちに知らされていたが、それについての知識は、過去長い間、この地上から失われていた。しかし神は真理を回復し、道を備えられた。また、福音の回復と共に、真の神権も回復された。神は予言者たちに、アダムやアブラハム、モーセ、古代の使徒たちが保持していたすべての鍵と権能と権威を与えられたのである。

神は神殿とその目的についての知識を回復された。今日、この地上には、主の特別なみ業を遂行するための聖なる建物が幾つか建てられている。そして、その一つ一つが「主の宮居」である。これらの神殿には、正しい権能によって夫と妻、また子供たちを永遠に結び固めることのできる人々がいる。このことは、たとえ多くの人に知られていなくても事実なのである。

これは、贖い主が讐で群衆に教えられた奥義のひとつである。

「わたしは口を開いて讐を語り、世の初めから隠されていることを語り出そう。」(マタイ 13:35)

これら値の知れない真理は、たまにしか聖典を読まない人には理解できないものである。

「いったい、人間の思いは、その内にある人間の霊以外に、だれが知っていよっか。それと同じように神の思いも、神の御霊以外には、知るものはない。……

生まれながらの人は、神の御霊の賜物を受けいれない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない。」(1コリント 2:11,14)

それにしても聡明で理解力があり、しかも高等教育を受けた人々が、上記の聖句にあるようにこの大いなる特権を無視したり、故意に軽視したりするとは信じられないことである。門は開けるこゝとができ、ギャップは埋めることができる。そして、人は決して尽きることのない幸福に向かって、安全かつ確実に歩みを進め、結婚を永遠のものとしてすることができるのである。

讐を使うことについて、救い主は次のように言われた。

「……あなたがたには、天国の奥義を知ることが許されているが、彼らには許されていない。……この民の心は鈍くなり、その耳は聞えにくく、その目は閉じている。それは、彼らが目で見ず、耳で聞かず、心で悟らず、悔い改めていやされることがないためである。」(マタイ 13:11,15)

それから救い主は、御自分のそばにいて、主の教えを理解していた弟子たちに向かって、このように言われた。

「しかし、あなたがたの目は見ており、耳は聞いているから、さいわいである。

あなたがたによく言うておく。多くの預言者や義人は、あなたがたのしていることを見ようと熱心に願ったが、見ることができず、またあなたがたの聞いていることを聞こうとしたが、聞けなかったのである。」(マタイ 13:16-17)

誠実で、王国の奥義を知りたいと心から願う人々は、祈りの気持ちをもって、自ら納得するまでそれを尋ね求めるといふことを、主は知っておられた。

主を陥れようとして難問を投げかけた偽善的なサドカイ人に、主がどのように答えられたか覚えておいで



あろう。

ある人が子供をひとりも持たずに死んだ。そこでその妻は、亡夫の弟と結婚した。しかし彼もまた子供を持たずに死んだ。そのため彼女は、モーセの律法に従い、三男、四男、五男、六男、七男と次々に結婚したが、皆子供を残さずに死に、とうとう七人の夫の妻となったこの女性も死んだ。さて、その狡猾な質問とは次の通りである。

「復活のとき、彼らが皆よみがえった場合、この女はだれの妻なのでしょう。七人とも彼女を妻にしたのですが。」(マルコ 12:23) 贖い主の答えは明快、簡潔で、誤解の余地がない。

「.....あなたがたがそんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからではないか。」(マルコ 12:24)

さて、この聖句はどういう意味だろうか。あなたにお尋ねしたい。サドカイ人たちは、自分たちの語っている事柄について何も理解していなかった。それに対して、主の言葉に非難めいたところがあっただろうか。主はサドカイ人たちに、「目の覆いを取り去って、よく見なさい。かたくなな心を開いて、理解しなさい」と言われただろうか。

皆さん、あなたは主が言われたこのみ言葉にどのような意味があり、その真意は何であると理解しておられるだろうか。この聖句はやや理解し難いものであったが、近代の啓示が与えられた今、その意味は明白である。

ジェームズ・E・タルメージ博士は、次のように述べている。

「主の言葉の意味は明らかである。すなわち、復活した状態において、この女が永遠にだれの妻なのかということについては、7人の兄弟の間に何の疑問もあり得なかった。一番上の兄を除く6人の兄弟はすべて、この世にいる間だけ彼女をめとったのであり.....復活の状態では、彼らはめとったりとついたりしないであろう。それは現世でも永遠にわたっても有効な結婚の『結び固め』を行なう聖なる神権の権能のもとに、夫婦の状態に関するあらゆる問題が、その時までにはすでに解決されるにちがいないからである。」(「基督イエス」 pp.629-30)

確かに、最初の夫はその妻と時を超えた儀式によって永遠に結ばれていた。彼女は夫が死ぬと同時に、自分も世を去って再びその夫に会うまで未亡人となったのである。さて、彼女は次男と、「死がふたりを分かちまで」の結婚をした。そして、子孫をもうけないうちに死がふたりを分けてしまったことは確かである。次男は現世と来世を隔てた幕を通り抜けて霊界に行った時、彼には妻がいなかった。ふたりの契約は死と共に効力を失ったためである。三男、四男、五男、六男、そして最後には七男と、次々にその女性と結婚したが、それらはいずれも一時的な、この世限りの結婚でしかなかった。それは「ふたりが共に生きている限り」という限定付きの儀式だったからである。そして、彼らが得ていた幸福、将来至上の喜びを得るという約束は、死をもって終わりを告げたのである。

何と悲しいことか。何と惨めなことか。私はある若い夫婦のことを思い出す。彼らの結婚生活は、「死がふたりを分かちまで」というあの危険な契約の言葉の下に挙げられた結婚式後、1時間で、自動車事故により無惨な終わりを遂げたのである。

民事結婚はこの世限りの契約であり、夫婦のどちらかが死ねば、それで終わりである。それに対して、永遠の日の栄光の結婚は、正当な権能の鍵を有する神の僕により聖なる神殿で執行される夫婦間の神聖な誓約である。それは死を超え、この世から永遠にわたって続くのである。

使徒パウロは、コリント人にこう語っている。

「もしわたしたちが、この世の生活でキリストにあって単なる望みをいただいているだけだとすれば、わたしたちは、すべての人の中で最もあわれむべき存在となる。」(1コリント 15:19) 私たちはこの聖句を次のように言い換えることができる。

「もしこの世の生涯でのみ私たちの結婚が堅固であり、結婚生活に大きな喜びがあって、家庭生活が幸せであるとすれば、私たちはすべての人の中で最もあわれむべき存在となる。」

パウロはさらにこう続けている。

「天に属するからだもあれば、地に属するからだもある。天に属するものの栄光は、地に属するものの栄光と違っている。

日の栄光があり、月の栄光があり、星の栄光がある。また、この星とあの星との間に、栄光の差がある。死人の復活も、また同様である。」(1 コリント 15:40-42)

パウロと同様に、当時多くの聖徒たちはこの意味を理解していた。しかし、今日の大勢のクリスチャンは、この言葉の奥に隠されている大切な真理を理解していない。天国はただひとつの場所ではないし、その状態も同一ではない。人の行ないが異なると同様、種々に分かれている。人は「現世での行ないに応じて」裁きを受けるからである。

近代の啓示の中で、主は言われた。

「この故に、わがまさに汝に与えんとする教えを受け入れてこれに従わんため、汝の心構えをなすべし。すべて、この律法を啓示さる者共はこれに従わざるべからざればなり。

見よ、われ汝に一つの新しく且つ永遠の誓約を啓示す。」(教義と聖約 132:3-4)

世の中でこの誓約を理解している人は比較的少ない。この新しくかつ永遠の誓約は、正当な権能の鍵を持ち正式に任命された指導者により聖なる神殿で執り行なわれる結婚の儀式である。男性も女性も、この地上においてこの栄えある祝福にあずかることができるのである。その根本にある深い意味は、贖い主御自身によって明らかにされている。

「この新しく且つ永遠の誓約に就きては、こはわが最高完全なる光栄のために定められたるものにして、わが最高完全の光栄を受くる者はこの律法を守らざるべからず、またこれを守るものとす。然らば、その者の行き止りなるべし。主なる神言う。」(教義と聖約 132:6)

パウロは日、月、星の光栄の世界について述べ、人は永遠の律法にどれだけ従順であったか、またどれだけ正義の行ないをしたかに応じてその場所を定められると語っている。そして、日の光栄の王国でさえ三種の天界、すなわち三種の階級があるのである。また、主は次のように述べておられる。

「而してその最も高きものを得んために、人はこの神権の位(すなわち新しく且つ永遠の結婚誓約を言う)に入らざるべからず。人もし然せずんばそれを得ることを得ず。人は他の天界に入るを得べし。されど、そはすなわちその人の光栄の国の行き止りにして、また殖ゆること能わず。」(教義と聖約 131:2-4)

主は永遠の結婚についてさらに明らかにしておられる。

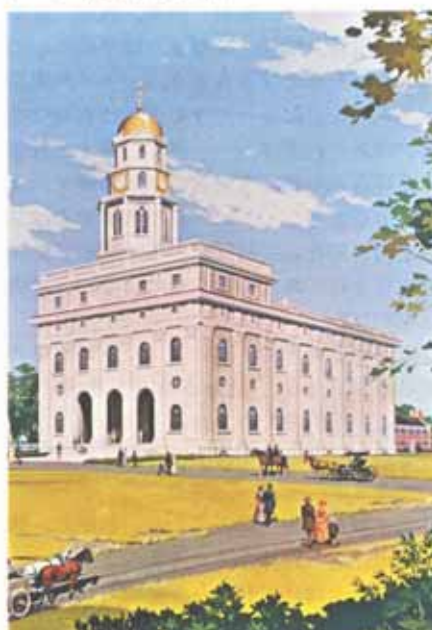
「一切の誓約、契約、約束、義務、宣誓、誓言、履行、関係、交際または予約にして、為されまたは結ばるとき、...

## 末日聖徒の神殿

カートランド神殿 (オハイオ)



ノーヴー神殿 (イリノイ)



...『約束の聖きみたま』によりて今も永世にも亘りて結び固められずば、.....死にし者より復活する時もその後にも何らの効験効能または効力あることなし。.....以上の事然るは、以上の目的を以て結ばれざる一切の誓約は人の死を以て終りを告ぐればなり。」(教義と聖約 132:7)

そういうわけで、単に「ふたりの生命のある限り」とか、「死がふたりを分かつまで」という約束で行なわれる結婚は、悲しくも息をひきとった時点で終わりを告げるのである。

主は憐れみ深い御方である。



しかし、憐れみが正義の働きを失わせることはない。主の憐れみは、主御自身が私たちのために亡くなられたことにより、私たちに及ぶようになった。そして主の正義は、主が私たちが裁かれる時にその効力を及ぼし、私たちの善い行ないに対して祝福が与えられるのである。

「何人もすべてこの誓約を拒絶するを得て、而もわが栄光に入るを許さるる者あらざればなり。

すべてわれによりて祝福を受けんと願う者は、その祝福を与うために定められたる律法と条件を創世の前より定められたるままに守らざるべからず。」(教義と聖約 132:4-5)

民事結婚は、各々の国の法律の定めるところにより認可された大勢の人々が執り行なうことができる。しかし永遠の結婚を挙行できるのは、正式に権能を授けられたほんのわずかな人である。救い主は言っておられる。

「わが名によりて為されざる捧物をわれいかで受くべきか。

または、わが命ぜざりしものを汝らの手より受け入るることをせんや。」(教義と聖約 132:9-10)

また、次のようにも述べておられる。

「この故に、ある男もしこの世に於て妻をめとるに、われに由らずまたわが言によらずしてめとり、またその男この世にある限りその妻と誓い、妻またその男と誓うに、この誓も婚姻も彼ら死にてこの世の外に去る時は効力あることなし。この故に、この二人この世の外に去る時は如何なる律法もこれを結ぶことなし。」(教義と聖約 132:15)

「われは主なる汝の神なり。われこの誠命を汝に与う。すなわち人はわれに由らずまたわが律法なるわが言によらずして父に来るべからず、と主は言う。」(教義と聖約 132:12)

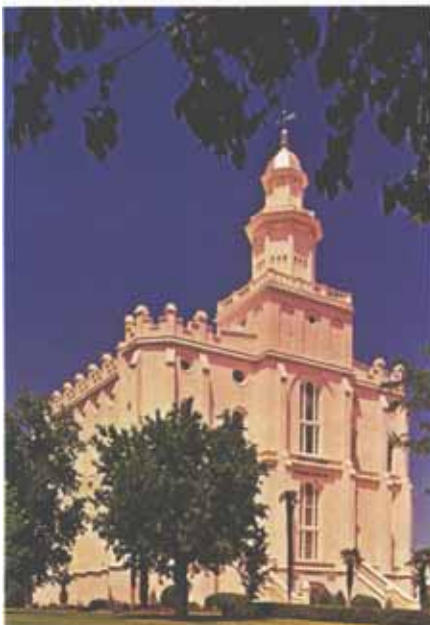
さらに次のように続く。「この世にあるあらゆるものは、たゞ人により王により公によりまたはそのほか権力によりまたは名義上のことにより、何にてもあれわれに由らずまたはわが言によらずして定めたることは、崩れ去りて人の死にたる後復活に於てもその以後に於ても遺ることなかるべし。」(教義と聖約 132:13)

何という決定的な恐るべき宣言であろう。私たちの存在は肉体の死によって終わることなく、私たちはいつまでも生き続ける。私たちはそのことを知っている。そのことを考える時に、実に多くの家庭で営まれている楽しく幸せな結婚生活、家庭生活が、神の教えに従わないということで、また神のみ言葉を理解していながら受け入れないといっことで死と共に終わってしまうとは、何とも恐るべきことではないだろうか。

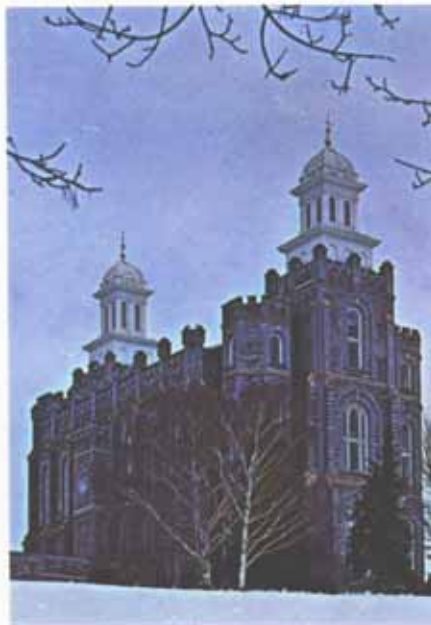
義なる男性と女性が自らの行ないに応じて正当な報いを受けることは、主のみ言葉によって明らかである。もし彼らが神の律法に従わないならば、一般に言う罰を受けることはなくとも、多くの制限を受け、最高の王国に進むことはできない。彼らは、すべての律法に従い、あらゆる戒めを守って生活した者に仕える僕となるのである。

ふさわしい生活を送ったにもかかわらず、契約を結ばなかったこれらの人々について、主は引き続き述べておられる。

セントジョージ神殿 (ユタ)



ローガン神殿 (ユタ)



「これらの天使はわが律法を守らざりし故に、殖ゆることを得ずしてただ別離孤独にて最高の栄に進み得ることなく救われたるまま永久に変わらず。これを以て、彼らは神々にあらず永久に神の、天使たるなり。」(教義と聖約 132:17)

何という終局、何という束縛、何という制約であることか。こうして私たちは、この時、之の生涯、この死すべき世が神にまみえる用意をしなくては

ならない時期であるという教えの重みを改めて認識するのである。永遠にわたって独身生活を送ることは、いかに寂しく、わびしいことであろう。条件を満たささえすれば、正当な権能の下に神殿で幸福な永遠の結婚をし、喜びを増し加えつつ進歩、成長して神の位にまで高められるというのに、果てしもなく別離孤独の状態に甘んじなければならぬとは何と悲しいことか。

再び主のみ声に耳を傾けてみよう。

「誠にまことにわれ汝らに告ぐ、汝らわが律法を守るにあらざればこの光栄に達するを得ず。

およそ最高の栄に進むを得て生命をつずくるに至る門は狭く、道は細くしてこれを「見出す者は少し。

そは、汝らこの世に於てわれを受け入れず、またわれを知らざるに由る。

されど、もし汝らこの世に於てわれを受け入れなば、汝らわれを知りて最高の栄に進むを得ん、すなわちわが在るところに汝らもまた在らん。

こは、永遠の生命なり。すなわち、唯一の智恵ある真実の神と、その神の遣わしたまいしイエス・キリストを知ることなり。われは、その遣わされたる者なり。故に、汝らわが律法を受け入るべし。

それ死に至る門は大きくしてその道は広そし。而して其所より入る者数多し。彼らはわれを受け入れず、またわが律法を守らざるによる。」(教義と聖約 132:21-25)

主を受け入れる者は主を信じ、主の戒めを守って生活し、主か求めておられる儀式を受ける。

あなたは永遠の行く末、永続する幸福、神にまみえ神と共に住むという特権を、自分の意思によって危険にさらしてはいないだろうか。研究や瞑想が足りないために、また偏見や誤解、知識の欠如から、この大いなる祝福と特権を自ら失ってはいないだろうか。自分の意思で、自らを永久に別離孤独で寂しく生き、他人に仕える者にしてはいないか。あなたは子供を亡くす時、また自分自身が世を去る時、その子を見放してみすみす孤児にしたいと思うだろうか。生涯で得る最高の喜びすべてか「更に付け加えられ」、強められ、増し加えられて永遠のものとする機会がありながら、ただひとり孤独なままで永遠の道を進みたいと思うだろうか。あなたはサドカイ人と同様に、この大いなる真理を無視し、退けたいとでもいうのだろうか。私はあなたかきょう、それらのことを熟考し、よく思いはかって、幸福な結婚生活を永遠に続ける歩みを踏み出すよう心から祈っている。どうかこの呼びかけを無視しないでいただきたい。目を開いて見、耳を澄まして聞くようお願いしたい。

永遠の結婚をし、絶えず自らを捧げてふさわしい生活を営むならば、必ずや限りない幸福と昇栄かもたらされるのである。

万軍の主のみ言葉をもってこの話を閉じたいと思う。

「そこで、あなたに勧める。富む者となるために、わたしから火で精錬された金を買ひ、また、あなたの裸の恥をさらさないため身に着けるように、白い衣を買ひなさい。また、見えるようになるため、目にぬる目薬を買ひなさい。」(黙示 3:18)

マンタイ神殿 (ユタ)



ソルトレーク神殿 (ユタ)





# 死者の贖いに関する示現

ジョセフ・F・スミス

1918年10月3日、私は自分の部屋にいて聖典の言葉に思いをはせ、世を贖うために神の御子が払われた大いなる贖いの犠牲と、贖い主の降臨にあたって御父と御子の表わされた大いなる驚嘆すべき愛について深く考えていた。人類は、御子の贖罪により、また福音の諸原則に従うことにより、救いを得ることができるのである。

このように思いをめぐらしていると、主が十字架上で亡くなられた後に福音が宣べ伝えられたポント、ガラテヤ、カパドキヤ、その他アジアの各地で教会に加わった初期の聖徒らに宛てた使徒ペテロの書簡が心に浮かんできた。私は聖書を開いて、ペテロの第1の手紙の第3章と4章を読み始めた。そして、次の聖句にかつて経験したことがないほど強く心を動かされた。

「キリストも、私たちが神のみ前に導くため、自らは義なる御方であるのに、不義なる人々のために、ひとたび罪のもたらす苦しみを受けられた。ただし、肉においては殺されたが、みたまによって生かされたのである。このため、彼は獄にいる霊たちのところに行って、教えを説かれた。

これらの霊というのは、ノアの時代に箱舟が造られていた間、神が忍耐して待っておられたのに従わなかった者たちのことである。その箱舟に乗り込み、水を経て救われたのは、わずかに八名だけであった。」(1ペテロ 3:18-20)

「このため、死人にも福音が宣べ伝えられた。それは、彼らが肉体においては人間として裁きを受けるが、霊においては神に従って生きるようになるためである。」(1ペテロ 4:6)

これらのことについて深く考えていると、主のみたまが私の上にとどまり、理解の眼が開かれた。そして、死者が、小さき者も大いなる者も共に、群れをなしているのが見えた。おびたしい数の義人の霊がひとつ所に集まっていた。彼らは死すべき世にあった間イエスの証に忠実であった者たちであり、神の御子の偉大な犠牲のひながたとしていけにえを捧げ、贖い主のみ名のゆえに艱難を受けた者たちであった。これらの者はすべて、父なる神と、御父の生みたまいし独り子イエス・キリストの恵みによりもたらされる栄えある復活に確固たる望みを抱きつつ世を去った者たちであった。

私は彼らが歓喜に満ち、解き放たれる日が目前に迫ってくることを共に喜んでいるのを見た。彼らは集まって、神の御子が霊界に来て死の縄目からの贖いを宣言したもうのを待っていた。彼らの眠れる塵は、骨と骨とが結合して腱と肉とで覆われ、その完全な形に回復されるはずであった。すなわち、彼らが完き喜びを受けるために、霊と肉体とが再び分かれることのないように結び合わされるのである。

この大群衆が死の鎖から解き放たれる時を喜び、互いに語り合いながら待っていると、神の御子が現われたもうた。そして忠実であった捕らわれ人に自由を宣言し、また永遠の福音、復活の教義、墮落からの人類の贖い、悔い改めを条件とする個人の罪の贖いについて彼らに教えを説かれた。しかし、御子は邪悪な者たちの所へは行かれなかった。罪深い者や、肉体を得ていた時に自らを汚して悔い改めなかった者には、御子の声は発せられなかった。古代の予言者たちの証と警告を受け入れなかった者たちは、御子の栄光を見ることも、御子のみ顔を仰ぎ見ることもなかった。これらの者のいる所は闇に支配されていた。しかし、義人たちの間には平安があった。そして聖徒たちは、自分たちの貝費いを喜び、ひざをかがめ、神の御子が死と地獄の鎖からの贖い主、解放者であることを告白した。彼らの顔は輝き、主のみ前より放たれる光が彼らの上にとどまった。そして彼らは主の聖きみ名を賛美した。

私はその時不思議に思った。なぜなら、救い主はユダヤ人とイスラエルの家の人々の間にあって約3年間導きと教えを施す業に携わり、彼らに永遠の福音を教え、悔い改めを叫ぶことに力を尽くされた。主が力ある働きと奇跡を行ない、大いなる権威と権能を持って真理を宣言されたにもかかわらず、主のみ声に聞き従い、主の来

訪を喜び、主から救いを受けた者はほんの少数であることを私は知っていたからである。しかも、主が、死者に導きと教えを与えられたのは、十字架上の死と復活のわずかな時に限られていた。私は、神の御子は、昔ノアの時代に神が忍耐して待っておられたにもかかわらず従わなかったために獄に捕らわれた霊たちのところへ行って宣べ伝えられた、と語ったペテロの言葉を思いめぐらした。主はこのわずかな時間内にこれらの霊たちに宣べ伝え、必要な業を成し遂げることがどうしてできたのだろうか。

こうして不思議に思っていると、私の眼が開かれ、理解力が強められた。そして私は、主が真理を受け入れなかった邪悪な者、不従順な者たちの間へ自ら行って教えられたのではないことを知った。見よ。主は義人の中から軍勢を組織し、使者を任命して権威と権能とを与え、闇の中にいる者たち、さらにはすべての人の霊のもとに福音の光を携えて行くよう命じられた。このようにして死者に福音が宣べ伝えられた。選ばれた使者は行って、主に受け入れられる日の来ることを言明し、捕らわれの身にある者すなわち罪を悔い改めて福音を受け入れるすべての者が自由を得ることを宣言した。このようにして、真理の知識がなく罪のあるまま死んだ者、予言者を拒み罪のうちに死んだ者に対して福音が宣べ伝えられた。これらの者は、神を信じる信仰、罪の悔い改め、罪の赦しを受けるための身代わりのバプテスマ、按手により授かる聖霊の賜について教えを受けた。またこのほかに、肉においては人間として裁きを受けるが、霊においては神に従って生きるようになるための資格を得る上で知っておかねばならない福音のすべての原則が教えられた。

このようにして福音が死者の間に知らされた。すなわち、小さな者も大いなる者も、正しからざる者も忠実な者も、神の御子の十字架上で犠牲を通して腰われたという嬉しいおとずれがもたらされた。こうして、贖い主が霊界での滞在期間を、この世において予言者として主を証した忠実な霊たちに教えを授け、備えをさせることに費やされたことが明らかになった。それは彼らを、反抗と罪のゆえに主御自身が行くことのできないすべての死者のもとに、贖いのおとずれを携えて行かせるためであり、僕の働きを通して彼らにも主のみ言葉を聞かせるためであった。

この義人の大きな群れに加わっていた大いなる力ある者たちの中に、すべての人の先祖、最も老いたる者である父祖アダムがいた。また、栄えある母イブが、この世において生ける真の神を礼拝した多くの忠実な娘たちと共にいた。最初の殉教者アベルも、さらにその弟で、力ある者のひとり、父アダムに生き写しのセツもいた。洪水を警告したノア、偉大な大祭司セム、忠実なる者の父アブラハム、イサク、ヤコブ、イスラエルの偉大な立法者モーセもいた。そして心の傷ついた者をいやし、捕らわれ人に自由を告げ、獄に捕らえられている者に解放を宣言するよう油注がれていた贖い主について予言したイザヤもそこにいた。

さらに、死者の復活の時に肉体をまとして出できたり、生ける霊の結合体となる乾いた骨が大きな谷を埋め尽くしているのを示現で見たエゼキエル、末日に神の王国が建てられ、決して滅びることも他の民の手に渡されることもないことを予見し、予言したダニエル、変貌の山でモーセと共にいたエライヤスの姿もあった。エライジャが主の大いなる恐るべき日に先立って来るとあかし証し、宣言したマラキもそこにいた。エライジャについてはモロナイも予言者ジョセフ・スミスに告げている。予言者エライジャは、父に与えられた約束を子らの心に植え付けるべく任じられていた。マラキが語ったこの言葉は、主の来る時に全地が呪いをもって撃たれ、ことごとく荒廃することのないように、時満ちたる神権時代に、主の神殿において死者の贖いと親子の結び固めのために大いなる業が行なわれることを予告している。

これらすべての霊に加えて、ニーファイ人の間で神の御子の降臨を証した予言者たちを含む多くの者たちが、大きな群れとなって解放を待っていた。なぜならば、死者は肉と霊とが長い間分離している状態を捕らわれと考えていたからである。主はこれらのことを霊たちに教え、さらに御自身が死人の中から復活した後によみがえる力を彼らに授けられた。彼らが御父の王国に入り、そこで不死不滅と永遠の生命の冠を受けるためである。その後彼らは、主から約束されたように、各々の働きを続け、主を愛する者たちのために備えおかれた祝福にあずかる者となる。



予言者ジョセフ・スミス、私の父ハイラム・スミス、ブリガム・ヤング、ジョン・テイラー、ウイルフォード・ウッドラフ、その他選ばれた霊たちも霊界にいた。彼らは偉大な末日の業の基を置く務めに携わるべく、時の満ちる時代までこの世に来るのをとどめおかれていた。神殿の建築と死者の贖いのためにそこで儀式を執行することも、偉大な末日の業の一部である。私は彼らが、神の教会において統治者となるように時の初めに選ばれた高貴にして偉大なる者たちの中にいるのを見た。彼らとその他多くの者たちは、生まれる前から霊界において基本的な教えを受け、主の定められた時に出て行って人を救うために主のぶどう園で働く準備をしていた。私は、この神権時代の忠実な長老たちが、死者の霊が住む広大な世界において闇に包まれ罪のかせにつながれている者たちの間で悔い改めの福音と神の生みたまいし独り子の犠牲を通じてもたらされた賄いの福音を、この世を去った後も引き続き宣べ伝えているのを見た。悔い改める死者は、神の宮居の儀式を受けることによって贈られるであろう。そして、自らの罪の代価を支払い、洗われて清くなった後に、各自の行ないに応じて報いを受けるであろう。彼らは救いを受け継ぐ"者だからである。

このようにして、死者の贖いに関する示現が私に与えられた。私はこれを証する。そして、私は主なる救い主イエス・キリストの恵みにより、この証が真実なものであることを知っている。6まことにその通りである。アーメン。'

# 神殿建設の意義

十二使徒評議員会会員 マーク・E・ピーターセン

末日聖徒イエス・キリスト教会が建てた神殿やその写真を見て、なぜそのような建物を建てるのか疑問に思ったことはないだろうか。

末日聖徒の神殿は、世界中のどの建物とも異なっている。他の民も美しい建物を建て、中には神殿という名前と呼ばれているものもある。しかし、末日聖徒の神殿と同じ目的、機能を有するものは皆無である。

末日聖徒はなぜ神殿を建てるのだろうか。それはどのように使われるのだろうか。礼拝や儀式のためだろうか。神殿の中ではどのようなことが行なわれるのだろうか。末日聖徒が時間と努力と財力とを傾けて神殿を建ててきたのはなぜだろうか。

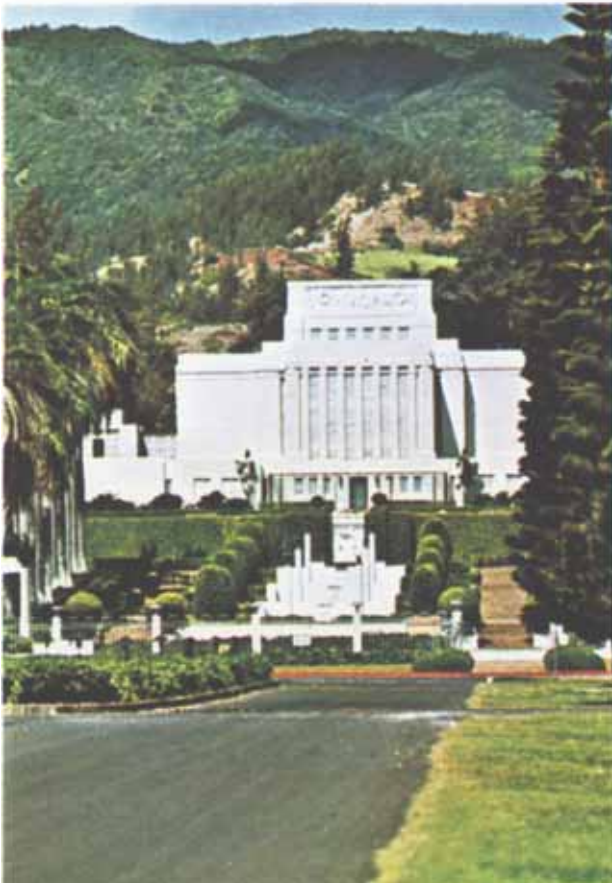
末日聖徒は1世紀以上もの間、神殿建設の仕事をし続けてきた。この業は予言者ジョセフ・スミスによって始められたものであり、実際に建設されたものはふたつ、建設予定のものがふたつあり、それらはすべて合衆国中西部に所在した。

西部に移ってから末日聖徒はこの業を続け、ユタに到着してから数年の間に4つの神殿を完成した。以来神殿は世界各地に建設されている。

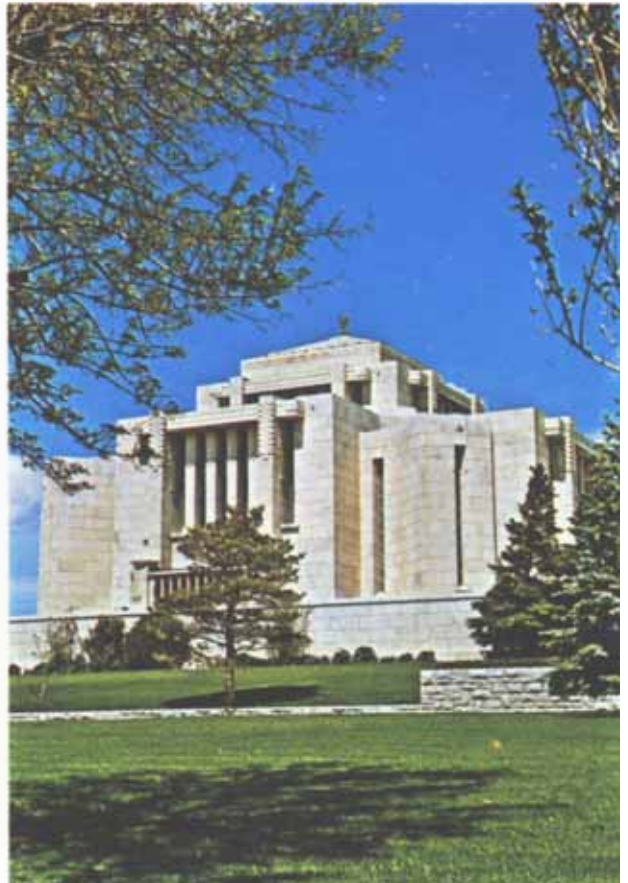
神殿建設には莫大な費用がかかる。教会員は、景気の良し悪しにかかわらず、また困窮と苦悩の淵にあっても、常に礼拝と感謝の精神でこの業を行ってきた。なぜなら、彼らは神のみこころに従順だったからである。末日聖徒は、主イエス・キリストの福音が予言者ジョセフ・スミスを通して地上に回復されたと宣言している。古代の福音に含まれるすべての事柄が、この回復を通して現代の人々にも与えられたのである。

聖書の時代、古代イスラエルの霊的救いのための聖なる儀式は、神聖な建物の中で執り行なわれていた。その建物はユダヤ人の会堂や普通の礼拝所ではなく、特別な目的のために特別に献堂された建物であった。荒野を旅していた時は、持ち運びのできる幕屋を使った。この幕屋は「主の神殿」と呼ばれるもので、サムエルの母が行って祈った

ハワイ神殿



アルバータ神殿 (カナダ)





のはそこである(サムエル上 1:9 参照)。そして流浪の生活が終わり、確固とした管理体制ができあがった時、彼らはエルサレムの地に輝かしい神殿を建てたのであった。

聖書の時代と同じように、主は再び私たちの時代に、信じるすべての者のための救いの儀式をそなえられ、その儀式を執り行なう場所としての神殿を建てるようにとお命じになった。

古代においては、主の救いの祝福を得るために、一人一人が次のことを行なわなければならなかった。

- (1) 主の戒めに述べられた義しい生活をする。
- (2) 主から確かな権能を受けた者によって執行される救いの儀式を受ける。

これらの儀式の幾つかはどこでも行なわれるものだが、中には特に神聖な儀式であるため、初期には幕屋や神殿のような建物で、さらには現在のような大きな神殿で行なうことを義務づけられるものがある。

古代の神殿でも神権者が神聖なる儀式を行っていた。すべての者でなく、資格を持った者だけがそこに入れるのである。権能を持たない祭司は神の怒りを被った。神聖な儀式が世の人々に完全に知らされたことはなかった。そこで行なわれた儀式は非常に聖いものであって、すべての儀式に参加できたのは選ばれた信仰深い人のみであった。

福音がこの末日に回復されて、神殿建設とその儀式も予言者ジョセフ・スミスを通じて回復された。末日聖徒は予言者によって、ただ「日の光栄の完き律法に従うこと」を通してのみ、日の光栄を永遠の世界で自らのものにすることができると教えられている。

1844年4月8日、予言者ジョセフは、神殿の儀式は非常に重要なものであって「それなくして我々は天の王座を得ることはできない。その目的のために準備された神聖な場所がなくてはならない。」(「教会歴史」6:318-20)と人々に語った。

したがって、神殿がなければ祝福は与えられないのであり、その結果聖徒たちは神殿を建てなければならなかった。これは主が命じたもうたことである。

聖徒たちは団結してその働きを始め、最初の神殿をオハイオ州カートランドに建てた。それは、1836年に献堂されて今も建っているが、今は教会のものではない。

カートランド神殿は単なる準備の神殿であり、そこでは数多くの神聖な儀式が啓示された。そして、神殿の仕事の大

アリゾナ神殿 (アリゾナ)



アイダホ・フォールズ神殿 (アイダホ)



部分は他の神殿で行なわれるようとおかれたので、この神殿は後に建'てられた多くの神殿と同じものではなかった。たとえば、バプテスマフォントはなく、また永遠の結婚の部屋など重要な儀式のための部屋もなかった。カートランド神殿はおもに礼拝のために建てられたのである。

聖徒たちは迫害によりカートランドを追われ、神殿は後に残された。彼らはミズーリ州ジャクソン郡に住みつき、そこで神殿用地を奉獻したが、迫害によってその建設を妨げられた。後にインデペンデンスからそう遠くないミズーリ州ファーウエストに居住地を見いだし、その地域に3番目の神殿のために礎石を置いた。しかし、それも再び迫害によって妨害されてしまった。

予言者ジョセフ・スミス の指示の下にイリノイ州ノーヴーへ移り住んだ後、彼らは4番目の神殿の礎石を置いた。その時は予言者とその兄弟である大祝福師ハイラムを迫害し苦しめた敵から攻撃されたが、ついに完成した。

末日聖徒は、ユタの平原を横断し、迫害にも屈しない熱意をもって再び神殿建設にとりかかった。彼らは救われて神のみ前に戻ることを求めた。神殿の儀式が救いに欠かせないものであることを理解していた彼らは、儀式を受けるための建物の建設に努力をいとわなかったのである。

しかし神殿は、なぜ人の救いにとって欠かせないものなのだろうか。存在の理由は昔も今も変わらないのであろうか。

エルサレムの神殿は古代イスラエルの宗教生活にどのような役割を果たしていたであろうか。エルサレムの神殿がユダヤ人の会堂以上のものであったことは、よく知られていることである。そしてそこが神権者だけが儀式を執行する神聖な場所であるということも認められていた。その「至聖所」は最も信仰深い者のために備えられていたということもよく知られている。教会堂における一般的な礼拝に関係のない神聖な儀式がそこで行なわれたこともまた事実である。そしてその儀式が、好奇心だけの人や信仰心のない人に見せるためのものではなかったことも知られている。

エルサレムの神殿は資格のない者によって汚された。イエスの時代、彼らは神殿に入ってそこを物を売買する場所とした。それは救い主が彼らを神殿から追いたて、「『わたしの家は祈りの家となえられるべきである』と書いてある。それなのにあなたがたはそれを強盗の巣にしている」(マタイ 21:13)と言われたことによってわかる。

末日に建てられた神殿も同様に神聖なものである。したがって、教会の最も信仰深い者たちのために備えられている。

スイス神殿



ロサンゼルス神殿 (カリフォルニア)





では神殿の内部では何が行なわれているのだろうか。一般の参観が許されていないことについてなぜだろうか  
かと興味をもつ人人がいるに違いない。

新たに建てられた神殿は一般に公開され、何千という人々がそこを訪れ、その美しさに驚嘆する。しかし建物が献  
堂され、神殿の仕事が行なわれるようになると、一般の人々は入ることを許されない。

神殿が献堂される前にやって来た訪問者は、各部屋を見てまわって皆感嘆の声をあげている。興味の的となるの  
は、いつもバプテスマフォントである。各神殿にはひとつずつこのフォントがあり、石や青銅でつくられた 12 頭の牛の  
背に乗っている。これは予言者ジョセフ・スミス時代に、他の事柄と同様に、ジョセフ・スミスを通して主が指示され  
た様式に従っているのである。

なぜ神殿内にバプテスマフォントがあるのだろうか。人々はどこでもバプテスマを受けられるのではないだろ  
うか。

生きている人はどこでもバプテスマを受けられるが、神殿内のフォントは死者のための代理のバプテスマを行  
なうように設けられたものである。

死者のためのバプテスマとは何か。それはキリスト教の教えであろうか。

ヘブル人への手紙の中で、私たちは信仰ある人々の祖先について読むことができる。パウロは述べている。「わ  
たしたちをほかにして彼らが全うされることはない。」(ヘブル 11:40)ここに生者と死者の救いの間には明確な関  
係のあることが示されている。

多くの人々は死者のための代理の業を信じており、ローソクをともし、死者のために祈る。

キリストご自身の贖いは代理の業であった。キリストは私たちのために死んで下さり、それがために私たちは生き  
ることができるのである。キリストは苦しみを通して私たちの罪を贈って下さった。

「神はそのひとり子を賜わったほどにこの世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで永  
遠の命を得るためである。」(ヨハネ 3:16)

「彼はわれわれのとがのために傷つけられ、.....その打たれた傷によってわれわれはいやされたのだ。」(イザヤ  
53:3-12 参照)

「また多くの人のががないとして、自分の命を与えた。」(マタイ 20:28) 貝費いの供え物として命を捧げられたの  
である。「御子イエスの血がすべての罪からわたしたちをきよめるのである。」(1ヨハネ 1:5-7)「あなたはほふられ、

ニュージーランド神殿



ロンドン神殿



その血によって人人をあがない.....」(黙示 5:9)

死者のための代理の業は聖書の教えであり、キリスト教の教義である。人がそれにあずからなければならないとしたら、その人々はどのような働きが神に受け入れられるかをはっきり知らなくてはならない。明らかに、人によって作り出された方法は認められない。このことをはっきり知るために、私たちは生者の救いに何が要求されているかを考え、また主は死者の救いのために何を要求しているかということを考えてみなくてはならない。

どのようにして生者は死者の救いの助けをすることができるのか。聖書では何と言っているだろうか。

ローソクをともすことだろうか。祈ることだろうか。東洋で行なわれているように、ただ墓に供物をそなえればよいのだろうか。

福音を知らずに死んだ人々も神のみ前に救われることができる。それは聖句でも明らかにされている。ではそれはどのようにしてなされるのだろうか。これは大切な問題である。

イエスは死者に宣べ伝えられた。使徒ペテロは救い主の死後、その肉体が墓に横たわっていた間に、霊は死人たちのところへ行き、そこでかつて地上に生活していた人人の霊に福音を宣べ伝えたと書いている。(1 ペテロ 3:18-20 参照)

さらにペテロはそのように言った理由を述べている。「死人にさえ福音が宣べ伝えられたのは、彼らは肉においては人間としてさばきを受けるが、霊においては神に従って生きようになるためである。」(同上 4:6)

これらの聖句は次のことを教えている。

- (1) イエスは私たちと同じように霊と肉体、また感情と感覚を持った御方である。
- (2) イエスが死者のところへ行った時、霊ははりつけにされた骨肉の体から離れていたが、イエスはなおも謙遜な「ナザレの大工」としての個人であった。
- (3) 死人もまた、ノアの洪水で死んだ人々でさえも、イエスご自身と同様に、英知のある個性をもった霊の存在であった。
- (4) 死者は霊界に住んでいるにもかかわらず、生者と同様に福音を聞くことができるように、理性や精神能力を十分豊かに持っており、彼らは生きてキリストの教えを受け入れるか拒むかの選択の自由を使うことができた。
- (5) イエスは救いの基となる福音を死者に教えたもうた。

オークランド神殿 (カリフォルニア)



オグデン神殿 (ユタ)





(6)福音を聞いて死者はそれを受け入れることも拒むこともでき、それによって「肉においては人間としてさばきを受ける」のである。そして福音を受け入れた死者は、聖句が示すように「霊においては神に従って生きるようになる」のである。

さて生きている人々の救いのために福音は何を要求しているのだろうか。

人は肉体を受けている間に、水に沈められるバプテスマのような救いに必要な儀式と律法を守り、「神に従って」生きなければならない。

バプテスマは必要だろうか。

イエスは必要だとお考えになり、自ら「すべての正しいことを成就するために」(マタイ 3:15)バプテスマをお受けになった。ましてや人々にはバプテスマが必要である。

イエスの弟子たちはバプテスマのヨハネよりもたくさんのバプテスマを施した(ヨハネ4:1-2参照)。またバプテスマを信仰そのものと同じく救いの本質的なものとして「信じてバプテスマを受ける者は救われる」(マタイ16:16)と教えたもうたのはイエスである。それであるのに、私たちはバプテスマを無視することができるだろうか。

バプテスマが生者の救いに欠くべからざるものであるなら、死者の救いにも欠くべからざるものではないだろうか。私たちはローソクをともしたり祈ったりして、バプテスマの代わりにすることができるだろうか。

では死者はどのようにしてバプテスマを受けるのだろうか、歴史から明らかなように、初期のクリスチャンたちは死者の代わりに生者にバプテスマを授けている。それは慣行となっており、パウロの時もそうであった。パウロはこの初期のキリスト教の慣習を死者の復活の証拠として語った。復活を疑っていた人々に彼は「そうでないとすれば死者のためにバプテスマを受ける人人は、なぜそれをするのだろうか。もし死者が全くよみがえらないとすれば、なぜ人人が死者のためにバプテスマを受けるのか」(1コリント15:29)と説いたのである。

これは死者の救いに関するまことのキリスト教の教義である。生者のために行なわれていた同じ儀式が死者のためにも行なわれていた。それは目新しいことではなかった。神は死者と生者に違ったことを要求しておられなかった。神は彼らをすべて同じように扱われる。彼らがたとえ霊界に住んでいようと、ペテロの言ったように肉における人間と同様に裁かれるのである。

プロボ神殿 (ユタ)



ワシントン神殿 (ワシントンD. C.)





こうして死者に福音が宣べ伝えられたので、その儀式を死者に代わって行なうことが可能となった。

バプテスマはそれが生者であろうと、死者であろうと変わりなく、水に沈めることを要求する儀式である。死者にバプテスマを施すことはできないので、生者が彼らのために代理としてバプテスマを受けるのである。

この末日に回復された福音の一部として、主は予言者ジョセフ・スミスにこの教義と儀式を啓示され、その儀式を行なうために神殿を建てるようにとお命じになった。

当時、聖徒たちはイリノイ州ノーヴーに住んでいた。彼らは主の命令に心を留め、その市に神殿を建てようと準備し、最初は建物の低い部分の完成をめざした。バプテスマフォントを築くためである。代理のバプテスマを執行するための美しい永遠の器を作ろうとしたのであった。それはしばらくたってから完成するのだが、建築期間中は、臨時に木で作られたフォントが用いられた。そして、予言者ジョセフ・スミスの指示の下にそこで死者のための神聖な儀式が行なわれたのである。

バプテスマはキリスト教のすべての儀式のうちで最も大切なものとして定められたものであり、神の子供たちの救いに関する神の計画に欠くべからざる基本的なものである。しかし人々はペテロやパウロの時代以後、バプテスマを忘れるようになり、それを認めなくなっていた。

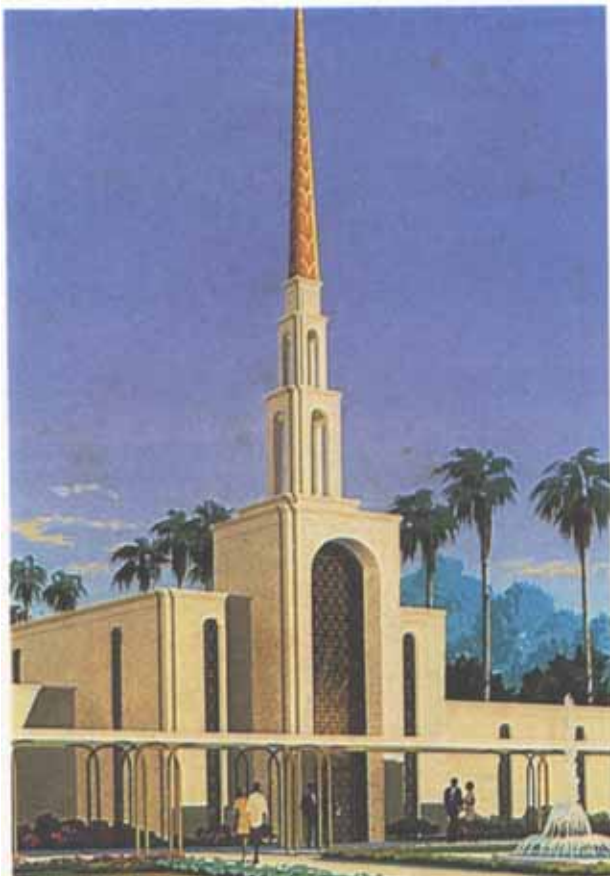
バプテスマなしに、人はどのようにして救われるだろうか。すべての人類は神にとって同じ子供たちである。すべての人は平等に扱われなければならない、すべての人は神のみ前に救われるために同じ条件に従わなければならない。

救い主ご自身は生者と死者両方の神であって、同じ光の中で全人類を皆重んじられる。主は「人はみな神に生きるものだからである」(ルカ 20:38)と言われた。ゆえに死者のための代理のバプテスマは、今の世でも古代とまったく同様にいつも行なわれる儀式なのである。

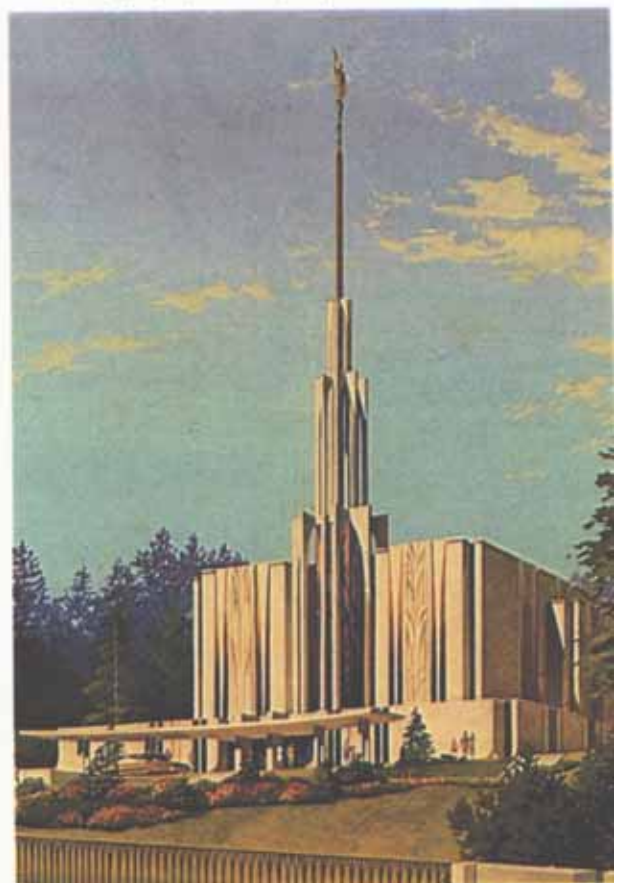
しかし、死者のバプテスマの業に加えて、神殿には他にも興味深いものがある。最も忙しい場所のひとつは、結び固めの部屋として知られているところである。多くの人々の使用に備えて、それぞれの神殿にはそのための部屋が普通5つか6つある。そこは、ある人々がキリストの福音の最も根本的な原則とみなしていることを行なうところである。

この教義をもっとよく理解するために、初めに家族生活が末日聖徒にとって最も大切なものであることを挙げな

サンパウロ神殿 (ブラジル)



シアトル神殿 (ワシントン)



くてはならない。家族は永遠に価値のあるものとして重んじられている。夫と妻は死が彼らを分かちまでではなく、永運に結び合うのである。

そのような両親から生まれる子供は、死や復活を経て、永遠の生命へと続く家族の一部となる。幸福で愛に満ちた家庭にもたらされるすべての徳性や祝福を、彼らは永遠に持って行くことができる。なぜなら家族生活は天における私たちの存在の一部となるからである。

主は結婚を決してはかないこの世限りのものとしては定められなかった、というのが末日聖徒の教義である。結婚は死が人類にもたらされる前に定められた。資格ある人々の結婚が神の力によってその目的のために執り行なわれた時、それは死を超えて続くのである。最初の結婚はアダムとイヴによるものであり、それはふたりがエデンの園にいて、死がまだ存在しなかった時に行なわれた。その結婚は死が何の制限も与えることのできない神の永遠の力によって行なわれたのであった。

後にアダムとイヴが主に背いたため、その罪によって彼らの体に変化し、死がもたらされるようになった。すなわち死すべき状態になったのである。しかし彼らの結婚は死に先立ち、神の力によって行なわれたので、それは死の後も続く永遠の結合となる。

アダムとイヴのように永遠の結婚をすることは、ほかの人にも可能だろうか。神の無限の力によって儀式が執行される時にそれができる。「死がふたりを分かちまで」という一般の結婚は、死をもって終わる一時的なものである。死がふたりを分かちまでと言って式を執り行なう人々が、死後までも結ぶ権能を持っていないことは明白である。彼らは永遠の結婚を司る力を持っていない。しかし、実際にこの世にはふたりを永遠に結ぶことのできる力が存在するのである。イエスは、天に昇られる前に使徒たちに、彼らが地においてつなぐことは何であっても天においてつながれるという力をお与えになった。(マタイ 16:19;18:18;ヨハネ 6:27;ローマ 15:28;II コリント 1:22;エペソ 1:13;4:30 参照)

使徒はその力を使っていたらどうか。確かに彼らがその神権の権威をもって行なうすべてのことは永遠の意味を持っていた。たとえば、バプテスマを受けた人は永遠の祝福を受けた。バプテスマがこの世限りのものであるとだれが言えるだろうか。バプテスマは、私たちが神のみ前に救われるために欠くことのできないものではないだろうか。救いは永遠にかかわる事柄ではないだろうか。

この神聖な権能を与えられた使徒は、天において結ばれる儀式を地上で執行した。それは地で行なわれる儀式が

サモア神殿



ジョーダンリバー神殿 (ユタ)





この世限りでなく、死後も神の天の王国において効力を持つことを意味している。

それは主の計画の一部である。そうでなければ、なぜイエスが地上と同様に天でも結ぶ力を使徒にお与えになったのだろうか。

この意義は死者に代わって行なわれる代理のバプテスマの原則を考える時にさらによく理解できる。ペテロは福音が死者に与えられたのは、肉においては人に従って裁かれた人々が霊界において神に従って生きるためであると述べている。

死者のためのバプテスマは、霊界において「神に従って生きる人々」と、肉においては入のために備えられた標準に従って裁かれる人々との差別をなくするために用意されている。生者と死者は救いに関する限り平等であるが、それを実現するために、この世と来るべき世の両方に効力を持つ神権の権能が求められる。使徒が必要なのは、彼らには今も永世にも結び固める力が与えられているからである。

バプテスマについてのこの原則は結婚にもあてはまる。結婚は神が定められたことである(創世1:28;2:24-25;9:1,7;35:11;ヘブル13:4参照)。前に述べたように、最初の結婚は死すべき状態の起こる前に全能の神ご自身が執り行なわれた。女性であるイヴを男性であるアダムに与えて、ふたりに生めよ、ふえよ、地に満ちよと命令されたのは神である。

この最初の結婚を執行なさった時、もちろん神は神ご自身の永遠の能力を行使された。そして後に、聖任された使徒たちにその能力の幾分かを与えて、彼らの行なう儀式が永遠に効力を持つようにされたのである。

この永遠の能力がバプテスマの恵みを不滅のものとしている。この同じ能力が、結婚に永遠性を与えない理由があるだろうか。なぜなら、バプテスマを定めたもうた方と同じ方が命じたもうたものだからである。

夫と妻は今も永世にも神権の力によって共に結ばれることができる。また同様に、子供たちは永遠にその両親に結ばれ、家族は永遠に共に結び合う。愛し合う夫と妻はその絆を死によって断つ必要がない。子供たちもみなし児ではなく、とこしえに親と結ばれるのである。

バプテスマによって人は神のみ前に戻ることができるが、同様に、この結婚の結び固めの儀式によって、人は神のみ前に結合した家族として立つことができる。もし私たちが愛する人たちを奪われ、人生の最も聖く愛に満ちた絆がひどくそこなわれるとしたら、一体天はだれにとって完全なところとなるだろうか。神は愛である。神は愛を永遠に保っておられる。私たちの家族関係は愛の上に打ち建てられるのである。そのような絆を定められた神はそれを神の王国でも保たれる。私たちの神殿には結び固めの儀式を行なう部屋がある。その神聖な部屋で花嫁と花婿は聖壇にひざまずき、聖なる結婚の儀式の内に永遠に結び固められるのである。まだ結び固められていない両親は、家族が聖なる神権の力によって永遠に結ばれるように、その子供たちを結び固めの部屋に伴っていくことができる。

しかし、もうこの世にいない多くの家族はどうであろうか。この世を去った夫と妻は、死が結婚の絆を断ち切っても再び共に結び合うのだろうか。「死がふたりを分かたずまで」という言葉のもとに執行された結婚は、永久不変の基の上に更新されるのだろうか。死んだ子供たちは、家族が来世において結ばれるために、死んだ両親のもとに再び戻るのだろうか。

地上と天上で結ぶ力は、この世でも来たるべき世でも効力を持つものであり、生者と死者のために必要な儀式を提供してくれる。この力は「霊においては神に従って」生きる人々にバプテスマという贖いの力を与えたが、同様に、生者が死んだ愛する人人の代理として行なう結び固めの儀式もこの力により与えられたものである。

だれがこの代理の業を行なえるのだろうか。だれでも参加できるのだろうか。

もう一度申し上げたい。主の家は秩序の家である。神に関して、混乱はいささかもない。すべての事柄は秩序正しく行なわれるので、人は自分の血縁の死者のためにこの業をするように定められている。

ではそれはどのように行なわれるのだろうか。その答えとしてこう問いかけてたい。死者と血のつながりのある人々よりも彼らをよく知っている人はいるだろうか。彼らに大きな関心を持っている人々は一体だれだろうか。彼らを助けたいと心から願う人たちはだれだろうか。

私たちは、死者をどのようにして助けることができるだろうか。死者の身元を明らかにするために自分の系図を準備しているすべての家族は、死者のための儀式を行なう必要がある。

身元が正しく調べられた死者の正しく執行された儀式は主に認められる。主はその目的のために特別に建てられた家でその儀式がすべてなされるように備えておられる。それが神殿なのである。

なぜ末日聖徒は神殿を建てるのだろうか。それは、神殿の中において、自分自身のためには結び固めの祝福を受

け、血縁の死者その他のためにはペテロが言ったように「肉においては人間の標準と機会に従って裁かれるが、霊においては神に従って生きる」ことを得させるよう、代理のバプテスマと結び固めを行なうためである。

このことについて、ジョセフ・スミスはある時人々に語った。「……この目的のため、死者のバプテスマを受ける人々のために特別な場所を建てなくてはならない。……なぜならその父、母、兄、弟、姉、妹、友人などを救いたいと願う人々は、その人たち一人一人のために、自分が受けた儀式をすべて受けなくてはならないからである。」（「教会歴史」6:318-20）

では近代において、この業はどのようにして、始まったのだろうか。その業は何をもととして始まったのだろうか。

偉大な聖書の予言の中に、「主の大いなる恐るべき日」の来る前に末日において地を訪れる古代の予言者エライジャが、近代においてどのような使命を果たすかが述べられている。エライジャの訪問は聖句が示すように重要なものであり、もしそれがなかったら地はのろいをもって打たれるのである。

マラキはその最後の数行にこの予言を記した。

「見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは予言者エライジャをあなたがたにつかわす。

彼は父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせる。これはわたしが来て、のろいをもって地を撃つことのないようにするためである。」（マラキ 4:5-6 欽定訳より和訳）

マラキはエライジャの使命をはっきりと述べている。それは「子供たちの心をその父に向けさせる」ため、今の人々と過去の人々の間に関心の絆をつくることである。言い換えれば、エライジャの訪問の明らかな目的は生者の心に先祖への関心を起こさせることだったのである。このようにエライジャの来訪の目的は聖句にはっきりと示されている。残された問題は、エライジャはすでに来たのかということである。そのためにまず私たちはこの質問について考えなくてはならない。最近人々の間に死者についての関心が高くなり、しかもそれが世に広まっているという事実はないだろうか。

もし調査をしてそのようなことが全然なかったなら、エライジャがまだこの世を訪れていないことは当然であろう。一方系図の活動が世に広まっているとしたら、それはエライジャがすでに来たという直接の証拠になる。聖典から明らかなことは、エライジャが来てその業を始めない限り、一般の人々の先祖への関心は高まらないということである。確かにエライジャが来てその業が始められ、予言が成就されたと知ることができるのはそのためである。

はたして実際はどうだろうか。

確かに系図への関心は高まってきている。それは現代に始まったもので、現在西洋のほとんどすべての国で生者の心をその先祖に向ける系図活動は世に広まっている。系図を準備するというはっきりとした目的をもつ何百という団体が近代になって組織されており、何十万という個人が自分の先祖の記録を探求をしている。また政治家や軍人や開拓者のように名誉ある家系を持つことを入会資格とする愛国と伝統を守る団体も作られている。

また多くの国々で系図に関する本や雑誌が出版され、新聞には系図の記事が掲載されている。

系図資料や家系歴史の資料を専門に保管する大規模な図書館もある。イギリス、フランス、ドイツ、スウェーデン、デンマーク、ノルウェー、スコットランドその他、ヨーロッパの国々では、政府が系図資料を保存し、それに必要な古い記録を備えるように命じている。

さて、訪問によってこのような関心をもたらしたエライジャは末の日において、「主の大いなる恐るべき日」の前に訪れると予言者が記している。

1836年4月6日、そのエライジャが、末日聖徒イエスキリスト教会によってオハイオ州カートランドに建てられ





た神殿の中で、死すべき人間の前に現われた。彼はそこで教会の予言者であるジョセブ・スミスとオリヴァ・カウドリに天からの能力を授けたのである。この訪れの際にエライジャは、自分がマラキの語った予言、すなわち子供たちの心をその父に向けさせるため、言い換えれば死すべき人間にその先祖の系図への関心を起こすために来たことと述べた。

系図団体、図書館、雑誌、あらゆる系図の記録、あらゆる系図の頁にある名前、およびアメリカやその他多くの国々で死者の探求に携わる人々、それらがエライジャが来たことの実際の証拠である。なぜならそれぞれが「子供たちの心をその父に向けさせる」というエライジャの使命を成就しているからである。エライジャの使命によってもたらされたものは私たち周囲の至る所にある。証拠は明白であり、疑いの余地はない。エライジャはすでに来た。偉大な予言のひとつがこうして成就されたのである。主の大いなる恐るべき日の近いことを証するこの出来事は、時のしるしのうちで最もはっきりしているものである。

この広範な系図への関心はエライジャの訪れを証するだけでなく、近代においてこの予言者の訪れを受けた人々の神聖な召しをも証している。それはあのカートランド神殿の中でエライジャの訪れを受けた人が全能の神に選ばれたということをも指している。

彼らは神の啓示を通して天使により権能を付与され、末日聖徒イエス・キリスト教会を組織した。そしてキリストの福音をこの地上に完全な形でもたらしたのである。彼らはバプテスマのヨハネやペテロ、ヤコブ、ヨハネから神権の聖任を受け、その力によって再び回復された福音を純粋なまま説いた。

彼らはエライジャの訪れの目的と子供たちの心をその父に向けさせる理由を説明した。

彼らはこの系図に対する関心が救いの計画の中で大切な位置を占めており、キリスト教の根本に密接な関係を持つものであると教えたのである。

私たちは、近代におけるエライジャの使命の結果として地上にもたらされた活動に、二重の意味を認めることができる。ひとつは、かつて地上に生きて現在は霊界に住む人々にとって必要な証明を準備するために全世界にわたって人類が家族の歴史や系図を調べることであり、もうひとつは、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員たちが、キリストに来るすべての人々がその王国で救われ得るために、神殿で福音の命ずる神聖な儀式を行なうということである。

この神殿での業は、全世界にわたる系図探求を通して準備される死者の身元の証拠なしには行なうことができない。このふたつの活動は予言者ジョセブ・スミスによって始められ、現在はそれを継ぐ人々によって行なわれているように、主のみ業を完成させるために双方が互いに他を補いながら行なわれてゆくものである。

これがモルモンが神殿を建てる理由なのである。



# 神殿を仰ぎ見て

ジョン・A・ウィットオー（1872 - 1952, 十二使徒評議員会会員）

神殿は主の家である。主はこの地上を訪れたもう時、神殿においでになる。私たちは主の家族に属し、前世において主の子供であった。そのため、この世における両親と子供たちがその家庭で共に過ごすように、主の家族に属するふさわしい者たちは、私たちが現に経験しているように、主の家で共に過ごすことができるのである。

神殿は教育の場所である。ここでは福音の原則の復習が行なわれ、神の王国に関わる深遠な真理が明らかにされる。霊の状態をふさわしく保って神殿に参入し、注意力を十二分に働かせるならば、私たちはここで福音の知識と知恵を豊かに得ることができる。

神殿は平安の宿る場所である。私たちはここで騒々しい外界での苦勞や煩いを忘れることができる。そして、みたまに関わる事柄のみに携わるので、霊的な思いで心を満たされる。

神殿は誓約を交わす場所である。そしてその誓約は、私たちが義しい生活を送るのに助けとなる。私たちはここで、神の律法に従うことを宣言し、福音の貴い知識を働かせて自分自身と他の人々へ祝福をもたらすことを約束する。そして、私たちは簡素な儀式を受けることにより、福音の恵みをあずかるにふさわしい人生を全うしようという強い決意を抱いて神殿を出てくるのである。

神殿は祝福にあずかる場所である。忠実であることを条件として、数々の約束が私たちに与えられる。そしてこれらの約束は、永遠に効力を有するのである。またこれらの約束を受けることで、私たちは天父を身近に感じることができる。こうして神権の力が、新たに、豊かに私たちに与えられるのである。

神殿は神聖な儀式が執行される場所である。人間の能力では答えられない数々の疑問について、人生の偉大な奥義がここで明らかにされる。

- (1) 人はどこから来たのか。
- (2) なぜこの世にいるのか。
- (3) この世の生涯を終えた後、どこへ行くのか。

ここでは、人生のあらゆる事柄の源である霊の欲求を満たすことが最も重要であるとみなされている。

神殿は啓示が下される場所である。主はここで啓示を下され、すべての人は人生において自分の助けとなる啓示を受けることができる。あらゆる知識、またあらゆる助けは、直接的にも間接的にも、主から与えられるのである。

主は御自ら神殿に來られなくても、聖きみたまによって、またこの地上で神権を有する人々を通して、ここにおられるのである。神権を有する人々は、聖きみたまによって、この地上における主のみ業を導く。したがって、信仰と祈りをもってこの聖なる場所に参入するすべての人々は、人生の問題を解決する助けを得るであろう。

主の家である神殿に参入することはまことに有益なことである。神殿は教育の場所、平安の宿る場所、誓約を交わす場所、祝福にあずかる場所、啓示が下される場所である。この特権に対する感謝の念と、霊的な機会を得たいという切なる望みが、私たちの心に満ちあふれてくるに違いない。

賜と祝福に満ちた神殿は、イエス・キリストの福音の求めに従おうとするすべての人々に開かれている。資格ある人々は、神殿に参入するための推薦状を各自の監督に求めることができるのである。

神殿で執行される儀式は神聖であるが、不可解なものではない。福音を受け入れ、それに従って生活し、自分自身を清く保つ人はみな、神殿の儀式を受けることができる。現に、信仰篤い教会員はみな、神殿に参入し、その特権を享受するように招かれ、勧められている。神殿は神聖な場所であり、祝福にあずかるにふさわしいことを証明したすべての人々にはここで聖なる儀式が施される。

福音に関する事柄は何であれ、すべて神殿内で行なうことができる。バプテスマ、神権への聖任、結婚、生者と死者のためのこの世から永遠にわたる結び固め、生者と死者のためのエンダウメント、福音の教授、導きと教えを施す業に関する会

議，その他福音に属するすべてのことがここで行なわれる。実に神殿内では福音のすべてが具現されているのである。

初めて神殿に参入する人に，その儀式が細部に至るまで完全に理解できるとは考えられない。そのために主は，繰り返し神殿に参入する手段を備えられたのである。神殿の儀式は各人がまず最初に自分自身のために受けなければならない。次いで，亡くなった先祖や友人のために，状況が許す限りたびたび受けることができる。この奉仕の業は死者のために救いの扉を開くと同時に，エンダウメントの本質と意味と義務を生者の心に植えつけるのにも助けとなる。私たちはエンダウメントについていつも思いを新たにすれば，永遠の祝福のもたらす影響力の下に，人生における自分の義務を一層よく果たすことができるであろう。神殿の儀式については，教義と聖約 124 章 39 - 41 節に記された啓示の中でわかりやすく述べられている。



青空の中に様々な光を反射するシンボルタワー



東京神殿の入口(上)  
1階にあるロビーと事務室

46

「この故に，われ誠に汝らに告ぐ，汝らの灌油の儀，汝らの聖なる洗い，死者に代る汝らのパプテスマ，汝らの聖会またレビの子らに由る汝らの捧物の記念，神よりの交通を受くる最も聖き所に於ける汝らの信託，汝らの律法と審判，啓示の始まりと，シオンの基と，シオンのすべての市制の栄と誉とエンダウメントは，わが聖き名のために建てよとわが民の常に命ぜらるるわが霊なる宮居の儀式によりて制めらるるなり。

われ誠に汝らに告ぐ，われその中にてわが民に儀式を示さんがためわが名のためにこの宮居を建てよと。

われ創世の前より隠されたること，すなわち時満ちたる神権の時代に関することをわが教会に示さんと図ればなり。」

神殿の中ではすべての人が白い装いをする。白は清さの象徴である。清くない者には決して神の家に入る権利はない。さらに，すべての人が統一された服装をするのは，天父なる神のみ前ではすべての人が平等であることを象徴している。神殿内では，富める者も貧しい者も，学問のある者もない者も，地位のある者もない者も，すべての人が隣あって座を占める。そして人はみな，霊の父である主なる神のみ前に義しく生活するならば，等しく大切な存在なのである。そして人は，霊的な理解と霊の健康を神殿内で受ける。そのような人はみな，主のみ前に平等である。

神殿の儀式を受けることは，最初から最後まで，荘厳な経験である。それは精神を鼓舞し，多くの知識を与え，勇気を与える。神殿に参入する人は理解力を増し，主のみ業を推し進める力を強められて出てくる。

神殿の律法とエンダウメントの誓約は麗しく，有益で，簡潔で，理解しやすい。そしてそれらを守ることもまた容易であ



る。しかしながら、世の教育を受けていなかった予言者ジョセフ・スミスが、人の霊的成長のための基をこのように整然と据えることができたというのは実に驚くべきことである。このことひとつをとっても、ジョセフ・スミスが死すべき人間の能力を超えた力によって導かれていたことが立証できる。

信仰と、主のみこころに完全に従おうとする精神をもって神殿の奉仕の業に携わる人々にとって、その日は輝かしい経験を得る日となることだろう。そのような人々には光と力が与えられ、将来必ずやそれは大きな助けとなることだろう。

主なるイエス・キリストの啓示された福音に心を向ける人は、特に神殿において、神のみ業がこの末日に特別な目的をもって再び打ち建てられたことについての確信を強める。神殿における奉仕は、「人に不死不滅と永遠の生命とをもたらす」(モセ1：39)この大いなる力強い業に携わる資格を私たちに得させるものである。

神殿における礼拝は永遠に福音の一部である。ジョセフ・スミスは福音を回復し、イエス・キリストの教会を再建する務めを託された結果、その生涯を閉じるまで絶えず神殿の建設と神殿における礼拝を推し進めた。教会が組織されて間もなく、インデペンデンスで神殿用地が奉献された。またカートランド神殿が建設され、完成すると、そこで奇しき出来事が数々起こった。ノーヴー神殿が建設されると、予言者ジョセフ・スミスの死後、その神殿でエンダウメントが執行された。ほかにも神殿用地が奉献された。神殿に関する数多くの啓示が一致して示しているように、この末日における福音の回復の中で予言者ジョセフ・スミスが非常な関心を持っていたのは、「創世の前より隠された」儀式の執行される神殿の基礎を据え、これを建設し、完成させることであった。事実、主は予言者ジョセフ・スミスに、神殿が建てられ、使用されない限り、救いの計画は完全に履行されず、十分には達成されないと繰り返し告げておられる。

なぜ神殿の建設と礼拝があらゆる時代に、あらゆる民の間で見いだされるのか、その訳を申し上げたい。その理由は、福音が完全な形でアダムに明らかにされたことである。すべての宗教と宗教上の慣習は、アダムに与えられた真理、またアダムから族長たちに伝えられた真理の断片にその源を有するのである。当時、必要な限り神殿の儀式が執行されていたことは疑いない。そして、それらの儀式は時代を追うごとにゆがめられ、受け継がれてきたのである。福音、すなわち創世の前に計画された福音の永遠性を理解している人々は、なぜあらゆる時代の民が神殿を建設し、これを使おうと努めてきたのかがよくわかるのである。

人は永遠の存在である。神殿における礼拝の意義を理解するためには、救いの計画を理解し、また救いの計画と神殿における礼拝との関係をも理解することが必要である。人類は「太初に神と共に」あり、この地上に送られてくるに先立って霊の存在として創造された。そして今、人類がこの世にいるのは、救いの計画を受け入れ、前世の生活を全うしたためである。私たちはこの世に住む権利を勝ち得たのである。この世に来よう強いられたのではなく、自分の意思を働かせて来ることになったのである。やがて私たちは別の存在の世界に行くであろう。そして、永遠の存在に関わる高い律法に従うならば、永遠に限りなく進歩成長を続けることだろう。

永遠の存在に関わる救いの計画には、ひとつの原則が含まれている。その原則とは、すべての人に福音が説かれ、主が主の子供たちのために備えておられる大いなる祝福と救いを受ける特権にあずかるまで、この地球に関する神のみ業は完了しないというものである。

人々はよく、いつ終わりの日が来るのか、いつ地球に大きな変化が生じるのかと問う。また、ダニエルやその他の予言者たちの言葉からこれらの出来事が起こる日を推定しようと、むだな試みをする人々もいる。一方私たちは、主を受け入れる備えが私たちにできた時に主はおいでになるということを知っている。すなわち、私たちが求められている業を完了した時に、早くもなく遅くもなく丁度その時に、主はおいでになるのである。その日の働きを成し遂げた時に、今日という日は終わり、新たな活動の時期が始まるのである。この地上の子供たちに割り当てられた業が救いの計画に従って成し遂げられた時、主は御自身の約束を思い起こされる。そして、新たな進歩の日の始まりである地球の終わりが来るのである。

この世の生涯を旅する私たちは、永遠の問題の解決に取り組んでいる。私たちの旅は終わりがなく、この世の生涯はそのほんの一部分に過ぎず、その目的は果てしない。そして、その旅と、旅の目的の中心にあるのが神殿なのである。



# 死者の贖いに関する示現

ジョセフ・F・スミス

1918年10月3日、私は自分の部屋にいて聖典の言葉に思いをはせ、世を贖うために神の御子が払われた大いなる贖いの犠牲と、贖い主の降臨にあたって御父と御子の表わされた大いなる驚嘆すべき愛について深く考えていた。人類は、御子の贖罪により、また福音の諸原則に従うことにより、救いを得ることができるのである。

このように思いをめぐらしていると、主が十字架上で亡くなられた後に福音が宣べ伝えられたポント、ガラテヤ、カパドキヤ、その他アジアの各地で教会に加わった初期の聖徒らに宛てた使徒ペテロの書簡が心に浮かんできた。私は聖書を開いて、ペテロの第1の手紙の第3章と4章を読み始めた。そして、次の聖句にかつて経験したことがないほど強く心を動かされた。

「キリストも、私たちが神のみ前に導くため、自らは義なる御方であるのに、不義なる人々のために、ひとたび罪のもたらす苦しみを受けられた。ただし、肉においては殺されたが、みたまによって生かされたのである。このため、彼は獄にいる霊たちのところに行って、教えを説かれた。

これらの霊というのは、ノアの時代に箱舟が造られていた間、神が忍耐して待っておられたのに従わなかった者たちのことである。その箱舟に乗り込み、水を経て救われたのは、わずかに八名だけであった。」(1ペテロ 3:18-20)

「このため、死人にも福音が宣べ伝えられた。それは、彼らが肉体においては人間として裁きを受けるが、霊においては神に従って生きるようになるためである。」(1ペテロ 4:6)

これらのことについて深く考えていると、主のみたまが私の上にとどまり、理解の眼が開かれた。そして、死者が、小さき者も大いなる者も共に、群れをなしているのが見えた。おびたしい数の義人の霊がひとつ所に集まっていた。彼らは死すべき世にあった間イエスの証に忠実であった者たちであり、神の御子の偉大な犠牲のひながたとしていけにえを捧げ、贖い主のみ名のゆえに艱難を受けた者たちであった。これらの者はすべて、父なる神と、御父の生みたまいし独り子イエス・キリストの恵みによりもたらされる栄えある復活に確固たる望みを抱きつつ世を去った者たちであった。

私は彼らが歓喜に満ち、解き放たれる日が目前に迫ってくることを共に喜んでいるのを見た。彼らは集まって、神の御子が霊界に来て死の縄目からの贖いを宣言したもうのを待っていた。彼らの眠れる塵は、骨と骨とが結合して腱と肉とで覆われ、その完全な形に回復されるはずであった。すなわち、彼らが完き喜びを受けるために、霊と肉体とが再び分かれることのないように結び合わされるのである。

この大群衆が死の鎖から解き放たれる時を喜び、互いに語り合いながら待っていると、神の御子が現われたもうた。そして忠実であった捕らわれ人に自由を宣言し、また永遠の福音、復活の教義、墮落からの人類の贖い、悔い改めを条件とする個人の罪の贖いについて彼らに教えを説かれた。しかし、御子は邪悪な者たちの所へは行かれなかった。罪深い者や、肉体を得ていた時に自らを汚して悔い改めなかった者には、御子の声は発せられなかった。古代の予言者たちの証と警告を受け入れなかった者たちは、御子の栄光を見ることも、御子のみ顔を仰ぎ見ることもなかった。これらの者のいる所は闇に支配されていた。しかし、義人たちの間には平安があった。そして聖徒たちは、自分たちの貝費いを喜び、ひざをかがめ、神の御子が死と地獄の鎖からの贖い主、解放者であることを告白した。彼らの顔は輝き、主のみ前より放たれる光が彼らの上にとどまった。そして彼らは主の聖きみ名を賛美した。

私はその時不思議に思った。なぜなら、救い主はユダヤ人とイスラエルの家の人々の間にあって約3年間導きと教えを施す業に携わり、彼らに永遠の福音を教え、悔い改めを叫ぶことに力を尽くされた。主が力ある働きと奇跡を行ない、大いなる権威と権能を持って真理を宣言されたにもかかわらず、主のみ声に聞き従い、主の来

訪を喜び、主から救いを受けた者はほんの少数であることを私は知っていたからである。しかも、主が、死者に導きと教えを与えられたのは、十字架上の死と復活のわずかな時に限られていた。私は、神の御子は、昔ノアの時代に神が忍耐して待っておられたにもかかわらず従わなかったために獄に捕らわれた霊たちのところへ行って宣べ伝えられた、と語ったペテロの言葉を思いめぐらした。主はこのわずかな時間内にこれらの霊たちに宣べ伝え、必要な業を成し遂げることがどうしてできたのだろうか。

こうして不思議に思っていると、私の眼が開かれ、理解力が強められた。そして私は、主が真理を受け入れなかった邪悪な者、不従順な者たちの間へ自ら行って教えられたのではないことを知った。見よ。主は義人の中から軍勢を組織し、使者を任命して権威と権能とを与え、闇の中にいる者たち、さらにはすべての人の霊のもとに福音の光を携えて行くよう命じられた。このようにして死者に福音が宣べ伝えられた。選ばれた使者は行って、主に受け入れられる日の来ることを言明し、捕らわれの身にある者すなわち罪を悔い改めて福音を受け入れるすべての者が自由を得ることを宣言した。このようにして、真理の知識がなく罪のあるまま死んだ者、予言者を拒み罪のうちに死んだ者に対して福音が宣べ伝えられた。これらの者は、神を信じる信仰、罪の悔い改め、罪の赦しを受けるための身代わりのバプテスマ、按手により授かる聖霊の賜について教えを受けた。またこのほかに、肉においては人間として裁きを受けるが、霊においては神に従って生きるようになるための資格を得る上で知っておかねばならない福音のすべての原則が教えられた。

このようにして福音が死者の間に知らされた。すなわち、小さな者も大いなる者も、正しからざる者も忠実な者も、神の御子の十字架上で犠牲を通して腰われたという嬉しいおとずれがもたらされた。こうして、贖い主が霊界での滞在期間を、この世において予言者として主を証した忠実な霊たちに教えを授け、備えをさせることに費やされたことが明らかになった。それは彼らを、反抗と罪のゆえに主御自身が行くことのできないすべての死者のもとに、贖いのおとずれを携えて行かせるためであり、僕の働きを通して彼らにも主のみ言葉を聞かせるためであった。

この義人の大きな群れに加わっていた大いなる力ある者たちの中に、すべての人の先祖、最も老いたる者である父祖アダムがいた。また、栄えある母イブが、この世において生ける真の神を礼拝した多くの忠実な娘たちと共にいた。最初の殉教者アベルも、さらにその弟で、力ある者のひとり、父アダムに生き写しのセツもいた。洪水を警告したノア、偉大な大祭司セム、忠実なる者の父アブラハム、イサク、ヤコブ、イスラエルの偉大な立法者モーセもいた。そして心の傷ついた者をいやし、捕らわれ人に自由を告げ、獄に捕らえられている者に解放を宣言するよう油注がれていた贖い主について予言したイザヤもそこにいた。

さらに、死者の復活の時に肉体をまとして出できたり、生ける霊の結合体となる乾いた骨が大きな谷を埋め尽くしているのを示現で見たエゼキエル、末日に神の王国が建てられ、決して滅びることも他の民の手に渡されることもないことを予見し、予言したダニエル、変貌の山でモーセと共にいたエライヤスの姿もあった。エライジャが主の大いなる恐るべき日に先立って来るとあかし証し、宣言したマラキもそこにいた。エライジャについてはモロナイも予言者ジョセフ・スミスに告げている。予言者エライジャは、父に与えられた約束を子らの心に植え付けるべく任じられていた。マラキが語ったこの言葉は、主の来る時に全地が呪いをもって撃たれ、ことごとく荒廃することのないように、時満ちたる神権時代に、主の神殿において死者の贖いと親子の結び固めのために大いなる業が行なわれることを予告している。

これらすべての霊に加えて、ニーファイ人の間で神の御子の降臨を証した予言者たちを含む多くの者たちが、大きな群れとなって解放を待っていた。なぜならば、死者は肉と霊とが長い間分離している状態を捕らわれと考えていたからである。主はこれらのことを霊たちに教え、さらに御自身が死人の中から復活した後によみがえる力を彼らに授けられた。彼らが御父の王国に入り、そこで不死不滅と永遠の生命の冠を受けるためである。その後彼らは、主から約束されたように、各々の働きを続け、主を愛する者たちのために備えおかれた祝福にあずかる者となる。



予言者ジョセフ・スミス、私の父ハイラム・スミス、ブリガム・ヤング、ジョン・テイラー、ウイルフォード・ウッドラフ、その他選ばれた霊たちも霊界にいた。彼らは偉大な末日の業の基を置く務めに携わるべく、時の満ちる時代までこの世に来るのをとどめおかれていた。神殿の建築と死者の贖いのためにそこで儀式を執行することも、偉大な末日の業の一部である。私は彼らが、神の教会において統治者となるように時の初めに選ばれた高貴にして偉大なる者たちの中にいるのを見た。彼らとその他多くの者たちは、生まれる前から霊界において基本的な教えを受け、主の定められた時に出て行って人を救うために主のぶどう園で働く準備をしていた。私は、この神権時代の忠実な長老たちが、死者の霊が住む広大な世界において闇に包まれ罪のかせにつながれている者たちの間で悔い改めの福音と神の生みたまいし独り子の犠牲を通じてもたらされた賄いの福音を、この世を去った後も引き続き宣べ伝えているのを見た。悔い改める死者は、神の宮居の儀式を受けることによって贈られるであろう。そして、自らの罪の代価を支払い、洗われて清くなった後に、各自の行ないに応じて報いを受けるであろう。彼らは救いを受け継ぐ"者だからである。

このようにして、死者の贖いに関する示現が私に与えられた。私はこれを証する。そして、私は主なる救い主イエス・キリストの恵みにより、この証が真実なものであることを知っている。6まことにその通りである。アーメン。'







# 神聖なる建物に集まる好奇の目



## 東京神殿，一般公開される

教会員以外の人々にもぜひ見ていただこうと、9月15日より一カ月間、東京神殿が一般に公開された。それに先がけ13日には特別招待客が招かれた。当日、500人ほどが訪れ、中には政財界で著名な方々も見受けられた。

日本・韓国地域代表役員の菊地良彦長老をはじめ、大管長特使のデビッド・M・ケネディー兄弟や神殿長会のメンバーが神殿入口で訪問客を歓迎し、地元の教会指導者たちによって神殿内の案内や接待がなされた。また、神殿に関しての説明をするために、神殿の横に特設のパネル展示場もつくられた。

伝道の一役を担うこの神聖なる建物が多くの人々に好奇の目で見られたことは確かである。見慣れない建物のつくりはもちろんのこと、聞き慣れない言葉や話のひとつひとつに関心を示す訪問者の姿がこの日ばかりは特に印象的だった。(9月13日取材)



